白い結晶の降った日～ボクらは剣士と巫女になった

カーティス・N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
白い結晶の降った日～ボクらは剣士と巫女になった

【Ｎコード】
Ｎ５９０３Ｈ

【作者名】
カーティス・Ｎ

【あらすじ】
四国の町にある動物園に突如、白いライオンが現れた。美しくも威厳に満ち、かつ出所は不明。たちまち話題は全国に広まったが・・・・やがて現れた邪神に、剣士の魂をもつ中学二年の真一が対峙する。

序章

四人の若い僧侶が床に屈んで座っていた。
各々が手にした細い筒を、別の棒で擦り続けている。
部屋の隅の暖炉には炎が燃え立っているが、よほど寒いのか、僧侶たちの口元からは白い息が長く伸びている。
石造りのその狭い部屋で聞こえるのは、彼らが奏でる微かな金属音と吐息、燃え立つ炎の音だけである。

薄く曇ったガラス窓の向こうには、純白の雪を冠した神々しいばかりの峰がのぞいている。
ここは世界の屋根と呼ばれるチベットの南方部、その標高五千メートルを越える急峻な峰に建つ寺院の一角である。そして僧侶達が為しているのは、この地に古くから伝わる修行の一つ、砂曼陀羅。
四人の握る筒からは、彩色の砂が糸のように流れ落ち、その先には、美しい幾何学模様が描かれている。東西南北に位置して座る彼らは、一辺二メートルほどの正方形の石盤の上に、世界の秩序を現し、この世の終わりなき平穏を祈っているのである。

彼らが、標高三千メートル地点にある本院から、この奥の院に移ってから、既にひと月が過ぎていた。これまでに出来上がった砂曼陀羅は二つ。今手がけているものは、明日を待たずに完成するだろう。
更に二つ、五つ目が完成した後、四人は本院に戻り、新たな修行者がこの場所に登ってくることになるのだ。

「うぅ・・」
突然、東の方位を受け持つ僧侶の手が震え始めた。その痩けた頬は硬く引きつっている。

「気にするでない、そのまま続けるのだ」
部屋の奥手、質素な祭壇の前に微動だにせず座している高齢の僧が、低く発した。
「しかし、尊師・・」
声をかけられた僧侶は、言いかけた言葉を切り、ぎこちなくも手を動かし続けた。
その視線の先には、白い下図から外れた砂が流れている。彼自身の過ちと見なされれば、曼陀羅は完成を見ずに、即、やり直しとなったはず。

「そなたの発する気脈に乱れはなかった。下図から外れた砂は、そなたの過ちではなく、天地の気脈の乱れが、そなたの腕を通して現されたもの。逆らってはならん」
非難を含まない高僧の言葉に、若い僧は落ち着きを取り戻した。
「今こそ大事。心を無にし、曼陀羅を通し、天地が伝えんとするものを受け入れるのだ」
「はい」
小さく頷いた若い僧は、他の三人と同様、白い下図に、ただただ意識を集中した。
体の強ばりが解けるとともに、手元は本来のラインから大きくずれ、何かしら有形のものを描き始めた。

・・歪な円形・・そして六つの単線・・
「これは、虫・・」
若い僧は無意識のうちに呟いていた。

「自然界の秩序の乱れが、東方の国に、邪なるものを産み落とさんとしている」
そろりと立ち上がり、曼陀羅の乱れに視線を落としていた高僧がゆったりと語った。

「では、その邪なるものに対して、均衡をもたらさんとするものは現れ出るのか・・我らはこの地上の頂きにて、世の平穏を祈り、見守るのみ・・」

1、白い獅子

夏休みに入って五日目。
四国、徳島県の東部の山中にあるその動物園は、見物人で溢れ返っていた。白い雄ライオンを一目見ようと、それこそ日本中から、人が集まって来ていたのだ。
波穏やかな紀伊水道を東に望むひび割れた舗装路には、動物園へと向かう車がびっしりと並び、エンジンの放つ熱気のために、山の稜線が揺らめいて見えるほどだった。

《奇跡のライオン、現る！》
そのニュースは、新聞の一面に大きく載り、テレビやラジオでもしきりに流れた。当のライオンの雪のように煌めく白い毛並みも、大いに目を引いたが、何よりも、その登場の仕方に人々は驚いたのだ。最初にそのライオンを発見したのは、動物園の猛獣担当の飼育員だった。
夏休み初日の朝、いつものように、雄と雌、二頭のライオンを、夜の管理舎から出そうとした時のこと、ふと檻の方に目をやると、長い草の間に、白い靄（もや）が漂っているのが見えた。

「散水チューブに、穴でも開いたのか」
首を捻りながら近づいていくうちに、靄は、意思を持ったかのように収縮し始め、見ている間にも、大きな塊となった。
「何が起こっている？」
目をこすった飼育員は、腰を抜かして驚いた。

靄の塊は、白く輝く大柄なライオンとなっていたのだ。たった今、目覚めたばかりのように、ぬうと頭を持ち上げ、伸びをするように四肢を突っ張っている。

「・・・」
かすれた悲鳴をあげながら檻からはい出た飼育員は、ドアを閉めてから、もう一度見つめた。
「あいつはいったい」
これまで、そんなライオンはいなかった。新しいライオンが来るなどという話は聞いたこともない。まして山猿でもあるまいし、どこからか檻に紛れ込むなんてことはあり得ない。どう考えても不思議だった。
「とにかく連絡しなければ」
飼育員は、管理舎についた電話で、お抱えの獣医と園長を呼び出した。

さっそく獣医が駆けつけたが、ライオンは麻酔を打たれることもなく、まるで落ち着き払った様子で検査を受けた。
「全くの健康体です。細菌に感染していることもなく、虫歯の一つさえありません」
「なあるほど」
少し遅れてやって来た園長は、獣医の言葉に大きく頷くと、既に園のものになったかのように他の二頭と引き合わせることにした。上手くいけば、すぐにでも、入園者の前にデビューできると考えたのだ。

「どうか、穏便に迎えてあげておくれ」
必死の祈りを背後に、のそりと歩み出た古株の二頭は、新参者を睨みつけながら、その周囲を回った。が、急に何かを悟ったかのように、ごろりと横になり、皮の薄い腹を見せた。二頭は、何処からともなく現れた若いライオンに、服従の姿勢を示したのだ。
「こいつはまさに、季節外れのクリスマスプレゼントだ。無論、ど

こから来たかを調査せんといけないが、デビューは、明日からでも、いや今日からでも。よろしいですよね、先生」
「ええ、医学的には全く問題ありません」
「ありがとうございます」
獣医の頷きに、園長は喜びの涙を流した。
なんたって、飛び切りのライオンが、神様からの贈り物のように現れたのだ。

持ち主が見つかり、すぐに返すことになろうと話題性は充分。たとえ短期間でも、スーパースターがいるだけで、入園者はぐんと増えるのだ。これで、入園者が少なくて飼育員たちの給料を払うのもぎりぎり、動物園を閉鎖しようかとさえ悩んでいたことが、一挙に解決されるかも知れない。
さっそく、日本中の新聞社やテレビ局に、不思議なライオンのことを知らせた。

「そんなこと、あるわけがない」
最初、記者たちは疑ってかかった。
「人気のない動物園が来園者を増やすために、夢のようなエピソードをでっち上げたのだ。ライオンは、どこからか秘密に輸入したに違いない」
当然、そう思った。
無視していてもよかったのだが、嘘を放っておくわけにはいかない。
それに、これはこれで大きな記事になる。
それで、世界中の動物園や動物保護協会、船会社に問い合わせた。
ところが、いくら調べても、日本に白いライオンが送られた記録はなかった。

取りあえずと、地元のラジオ局の中継車が取材にやってきたが、
「いやー、すばらしいのなんのって。七千年以上も昔、西の彼方、

古代オリエント地方で、白い獅子が聖獣とされていたそうですが、まさにその聖獣が、この世に現れたようです」
ラジオで流れた声は、感動しきりで、このことがニュースの火種を撒き散らした。その日の昼過ぎには、余計な勘繰りを捨てた記者や、ビデオカメラマンがわんさと集まってきていた。

「ええ、こちらでも、様々な所に問い合わせてみました。しかし、いっこうに彼の持ち主はわからないのです」
腹の突き出た園長は、ほくほく顔でライオンを見つめながら、記者の向けるマイクに話した。
「皆さん、このようなことが、これまでにあったでしょうか。それに彼のなんとも素晴らしいこと。ぜひ、彼に、神様から贈られた百獣の王に会いにきて下さい。会えば、きっと皆さんの心に、力が漲ってくることでしょう」と。

実際、このライオンは、本物の王者のようだった。
ずいぶん離れた檻で、いつも苛ついているように歩き回っていた黒豹は、静かに頭を下げて座り、狼たちは崇めるように遠吠えをした。すぐ隣の柵にいるミーアキャットは、兵士のように一列に並び、このライオンを見つめた。
園内の動物たちは何かしらを察知し、いつもとは違う行動を見せるようになっていたのだ。

見物に来た人は、皆満足した。
園長の言った通り、このライオンを前にすると、「よし」とばかりに、心のどこかに忘れていた力が、沸き上がってくるように感じたのだ。
お年寄りの中には、座っていた車椅子から立ち上がり、ありがたいものを拝むように手を合わせる人もいた。

2、動物園での事件

「健太、正、急げ！動物園が閉まってしまう」
剣道着姿の三人の少年が、汗を滴らせながら自転車で坂を登っていた。先頭を走る少年は、腰を浮かせ、力強くペダルを漕いでいる。後ろの二人はハンドルをふらつかせ、今にも倒れそうだ。

夕方近くになり、さすがに登りの車の渋滞は解消していた。クラクションを鳴らしながら、次々と三人を追い越していく。その一方、下りは混み、連なった車がだらだらと走っていく。エアコンをかけているのか、閉めきった窓の向こうの顔は、どれも涼しげで快適そうだ。

「くう！みんな満足そうな顔してやがる。早く！」
「まだ、大丈夫だって」
太り気味の少年が、ゼイゼイと息を切らしながら訴えた。
「正、今、何時だ？」
小柄でやせている少年は、あまりの苦しさに、泣きそうな顔をして腕時計を見た。
「四時三十分、まだ一時間あるよ」
「よおし、いける。間に合うぞ」
先頭を行く少年は大きく息を吐きながら、サドルに腰を降ろした。

三人は、山の麓、海沿いの町にある津田川中学校の二年生だった。皆、剣道部に入っていて、つい先ほどまで稽古をしていたのだ。部活の後で、くたくたのはずだったが、噂のライオンを一日でも早く見ようと、動物園に繰り出したのだ。各々の自転車の籠には、服が入ったバックが積まれている。けれど一分でも時間が惜しく、着替えもせずに体育館を飛び出してきたのだ。

先頭を走る少年は、平田真一。
勉強は苦手だが、運動については、生まれつきの才能を持っているらしく、特に剣道の腕前は、師範をも打ち負かしてしまうほどだった。間違ったことは大嫌いで、正義感に溢れているのだが、あまり考えずに突っ走ってしまうので、親や先生から、よく大目玉を喰らっていた。

太り気味の少年は、木沢健太。力も強く、剣道の腕もなかなかのものだが、真一には到底かなわない。いつも冗談ばかり言っているお調子者だ。
その隣は、田中正。勉強は得意だが運動はからきしだめで、剣道では地域の小学生にも打ち込まれてばかり。でも、真一と健太が大好きで、いつも一緒に行動している。

「とうちゃーく、とうちゃーく」
広い駐車場を過ぎ、三人はやっとのことで動物園の入り口前にたどり着いた。
自転車置き場は、隙間もないほどにぎっしり詰まっている。仕方なく三人は、端に植わっている椰子の木の柵にチェーン鍵をかけた。近くで車の誘導をしていた警備員がちらりと見たが、いいよとばかりに頷いた。

入場門の上のカバの時計は、五時になろうとしている。閉園時間までは、あと三十分。三人は慌てて入場券を買い、門をくぐった。お目当てのライオンのいる檻は、中央の小道をずっと下った奥、サバンナ地区にある。
「いくぞ」
「急がなくても大丈夫よ」
走りだそうとした真一に、入場パンフレットを配っていた係員が笑

いながら声をかけた。
「今は特別期間。開園時間は一時間延長していますから」
「なぁんだ。知らなかった」
ぼやいた真一の後ろで、健太と正は気が抜けたように、その場にへたり込んだ。

「なあ、ジュースでも飲んで行こうぜ。体が干からびて、ミイラになっちまう」
健太が、汗一杯の顔を震わせた。隣の正も咳き込みながら頷いている。
「そうするか。とにかく、間に合ってよかった」
真一はにっかりと笑い、二人の肩を叩いた。

「ふう、やっぱり、運動したあとのジュースは最高だぜい」
ペットボトルの中身を、一気に飲みほした健太が、満足そうに言った。
「まったくまったく。それにしても、健太は飲むのが早いな」
真一は健太の赤い顔を、呆れながら見つめた。
「僕、知ってる。健太君の水筒の中身、オレンジジュースだってこと」
と、正がぼそり。
「そいつはずるい。道理で、いつもあんなに美味そうに飲んでるんだ」
「それはいいっこなしよ。ねっ」
「うぷっ」
肩をすくめてウィンクした健太に、あやうく真一は、飲みかけのジュースを鼻から吹き出しそうになった。
「そろそろ行くか」
「奇跡のライオン様、もうちょっとで会えますよ」

三人は園の中ほどにある休憩所を出た。夕方五時も過ぎ、太陽は尖った西の山に隠れようとしていたが、まだギラギラと輝いていた。閉園が近いというのに、動物園は見物人で溢れていた。ライオンの描かれた風船を握りしめている子供がたくさんいる。中には、ワイシャツにネクタイをした大人も混じっている。きっと会社を早引きして来たのだろう。

「ねえ、あの子たち・・」

汗で黒ずんだ剣道着姿の三人を見て、通り過ぎる人が笑っていた。三人は、そんなことにはお構いなく足を急いだ。胸膨らむ思いに、恥ずかしさや疲れなど、どこかに忘れてしまっていた。

ミーアキャットの柵の向こうに大きな檻があり、黒だかりの人がいた。

「あそこだな」

顔を見合わせて頷いた。あと僅か二十メートルほどの所だ。

その時だった。

「きゃー」

甲高い女性の叫び声が、陽気な賑わいを切り裂いた。

人々が、パニックを起こした獣の群れのように、どっと走りだしてくる。数え切れないほどの風船が、空に舞い上がっていった。

「逃げろ！」

カメラを首にかけた中年の男性が、怒鳴りながら走っていった。

「いったい、なに」

急に逃げろなどと言われても、心の準備というものがある。三人は訳もわからず顔を見合わせ、立ち止まった。

見物人が引き潮のように去った後、頑丈な金網を張り巡らした檻が

すっきりと見えた。中には、茶色の毛並みをした二頭のライオンが気だるそうに横になっている。
そして、何ということか、網のこちら側には、白いライオンが豊かなたてがみを揺すって立っていたのだ。

「ライオンが逃げ出したんだ」
正が呆然とつぶやいた。
健太は銅像になったかのように、ぴくりとも動かない。その太い手は、どこかあらぬ方向を指したまま。
ライオンは慌てて逃げる人間など、まったく眼中にないようだった。まさに王者の風格で輝く太陽に顔を上げていた。

「あっ！」
真一の目が見開かれた。
ライオンの逞しい前脚から、十メートルと離れていないベンチの前に、長い黒髪の少女が倒れていた。健太の手はそこを指していたのだ。
「村井・・さん」
それは、隣のクラスの村井綾乃だった。

夏休み直前に転校してきたのだが、その名前はすでに学年中に知られていた。
学年合同の歌の練習の時のこと。彼女の口から流れ出た歌声は、周りの生徒はもちろん、先生がピアノの伴奏を忘れてしまうほどに美しかったのだ。
そのままでは練習にならず、結局、彼女は独唱パートを受け持つことになったのだが、その可愛らしい外見と美しい歌声に、メロメロになってしまった男子も少なくない。
真一は、逃げ去った人々の中に、同じ学年の女子を見たような気が

した。きっと、クラスメートと、白いライオンを見にきていたに違いない。

「助けなくては！」
真一は、大きく息を吸った。
「だ、だめだよ」
正は後ろで、引きつったように半べそをかいている。
「このまま、放ってはおけない」
綾乃の周囲には誰もいなかった。飼育員が駆けつけてくる気配もない。そこから、二十メートルほどの所に真一らは立っていた。
お年寄りが落としていったのだろう、足元に、黒いステッキが転がっていた。即座に、それを拾った真一は、竹刀を持つように握りしめ、剣道の試合の時のように、下腹からゆっくりと息を吐き出した。

「よし」
バクバクと打っていた心臓が、幾分か落ち着いてきたようだった。
綾乃は、地面に倒れたまま動こうとしない。長い髪が、陽炎ゆらめくアスファルトの上に投げ出されている。
たてがみを大きく揺すったライオンが頭を下げ、綾乃の方を見た。
持ち上げた前脚の爪が、鋭い刃物のようにきらりと光った。
「こっちだ！」
ステッキを正面に構えた真一は、干からびた喉から声を絞り出した。
『・・・！』
ライオンの青い目が、ジロリと向けられた。陽に反射して、光線を放っているように見える。
「ひいー」
健太が高い声を出して倒れた。へたり込んだ正は、目をつぶって歯をガチガチ鳴らしている。
真一はステッキを高く掲げ、じりじりとライオンに近づいていった。

ライオンは全く動こうとせず、じっと真一の目を見つめたまま。
『視線を外してはいけない。こちらの気合いで、相手の動きを封じこめるんだ』
静かに心につぶやいた。
それにしても、なんと大きいのだろう。白い毛並みのせいか、普通のライオンより一回りも大きく見える。

ズ　ズズ・・
地面をする靴底の音だけが、静けさを割っていた。
いつの時か、最大限の集中をしている真一の息は止まっていた。
すでにライオンとの距離は五メートルあまり。ここから一気に跳びかかれば、あの頭に一撃をくらわすことができる。しかし、それがどれほどのダメージを与えられるだろう。あの大きな牙と逞しい前脚なら、木刀だって、小枝のようにへし折られてしまうに違いない。

『とにかく飼育員が来るまで時間をかせぐ・・もしも、間に合わなかったら・・』
真一は左足を後ろに引き、ステッキをさらに高く掲げた。そして一度、唇を噛みしめて言った。
「村井さん、ここを離れろ」
「だめ、動けないの」
視界の端に、綾乃の頭が動くのが見えた。

「・・　・・・・　・　・・　・・・・」
どこからか微かなメロディが聞こえてきた。
恐怖の淵に追い込まれたせいだろう、綾乃が歌を口ずさんでいた。

その時だ。
目の前のライオンが、喉まで裂けるかとばかりに口を大きく開き、牙を剥き出したのだ。

「キエーイ！」

真一は、気合いもろとも、ライオンに跳びかかった。

3、病院で

鼻をつく消毒薬の匂いに、真一は目を覚ました。
母さんが、顔に手を当てて泣いている。
「こら、心配かけるな」
視線を下げた父さんが気づき、顔を綻ばせながら、ごつごつした手で頭を撫でまわした。

起きあがって見回せば、そこは、白いカーテンに囲まれたベッドの上。病院の一室だった。首に包帯が巻かれ、中がぴりぴりと痛んでいる。
はて、自分はどうしたのかと考える間もなく、母さんが大泣きしながら抱きついてきた。
「・・・く、苦しい」
　プロレスの羽交い締めみたいに、きつく抱きつく母さんに、やっとのことで言った。鼻を啜りながら、腕を弛めた母さんは、今度は、額やら頬にキスをしてきた。
「やめてくれよ、赤ん坊じゃないんだよ」
「そんなこと言わないで。どれだけ心配したことか」
気持ちは解らないでもないが・・ぼうぼうと熱い息を掛けてくる母さんを、ジロリと睨みつけた。
「もう、親の気も知らないで」
「そんなの、知りたくもない」
「なんて口のききかたするの」
冷ややかな空気が流れたが、おかげでやっと自由になった。

「お目覚めだね」
カーテンを開け、白衣を羽おった若い医者が入ってきた。後ろには、弟で小学二年生の稔がいる。

「今の会話を聞いて安心しました。それだけ元気なら、ショックは受けていないようです。先ほどもお話ししましたように、首の傷は大丈夫。傷口は浅いし、細菌の感染もありませんから」
拗ねるように横を向いている母さんに、医者は笑いながら言った。
「けど、真一君、危なかったね、もう少し深く噛まれていたら死んでいたところだよ。それにしても大した勇気だ。せっかくだから、握手させてもらえんだろうか」
医者はぎゅっと手を握りしめてから、部屋を出ていった。

「兄ちゃん、やるじゃん！」
ベッドの上に飛び乗ってきた稔が、真一の胸を叩いた。
「こら、病院で、はしゃぐんじゃありません」
母さんが、トランポリンの上のように跳ねる稔を引きずり降ろした。開いたカーテンの向こうには、空のベッドが二台見える。この病室に寝ていたのは、真一ひとりだったようだ。
「確かに、結果がよかったからいいが、しかしな・・」
父さんは、難しい顔をして唸っている。口にこそ出さないが、無茶をしたことを怒っているようだ。
「ねえ、僕はどうなったんだい。あのライオンは？」

「おう、ちょうどニュースの時間だ」
気持ちを切り換えた父さんが、枕元にあるテレビをつけた。いつも、風呂を出た頃にやっているニュースが始まった。時間は、既に夜の九時を過ぎていた。
「やっ、出た出た」
軽やかな音楽とともに最初に画面に映し出されたのは、あのライオンの写真だった。その隣には、真一の写真も並んでいる。去年、海水浴にいった時のものだ。選りによって、海水パンツ姿のあんなのが映されるなんて・・
「おまえの写真って、あれぐらいしかなくてな」

横目で睨むと、父さんはそっぽを向いて笑った。

《本日、午後五時半ごろ、あの白いライオンで有名な動物園で事件が起こりました》

キャスターの男性が話し始めた。

《なんと、白いライオンが、五メートルを超える金網を飛び越え、外に逃げ出したのです。一人の少女が逃げ遅れて襲われそうになりました。その時、ステッキを握った少年が飛び出して、ライオンに立ち向かったのです。

ライオンは頭を叩かれて、おとなしくなりましたが、少年の首に一度噛みつきました。少年は、すぐに病院に運ばれました。命に別状はないとのことですが・・・

あ、たった今、少年が運ばれた病院から連絡が入りました。少年が目を覚ましたそうです。医師の話では、傷は浅く、意識もしっかりしているとのこと。明日にでも退院できるそうです。

その少年の名は、平田真一君、動物園のある地元の津田川中学校の二年生です。それにしても、なんと勇気があるのでしょう。真一君をこのように育てているご両親も、きっと立派な方にちがいありません》

ニュースは少し大袈裟に語られていた。映された写真といい、真一は、困ったように顔をしかめた。その一方、父さんは嬉しそうに鼻をかいている。

「母さん、僕ら、立派なんだってさ」

ニュースに釘づけになっていた母さんが、父さんの耳を捻りあげた。

「まあ、いい気になって。それどころではなかったのよ。いいこと、真一は死にかけたのよ！」

「わかっているけどさ。僕ら、全国のトップニュースで誉められたんだよ」

「すごいや、兄ちゃん。でも、弟の僕だっていることを言ってもい

いのに」
稔が膨れ面で言い、父さんと母さんは、思わずブスッと吹き出した。
《えー、問題のライオンですが、》
ニュースはまだ続いていた。
《神様からのプレゼントとして注目を浴びていた白いライオンですが、このような事件を引き起こしたため、国内の動物園に置いておくことはできなくなりました。外国の動物園に、引き取り先を探すとのことです》
真一はほっと息をついた。
『あのライオンは、特に凶暴ってわけじゃない。あいつにとっては動物園の檻が低過ぎただけなんだ。もし殺されることにでもなったら可哀想すぎる』
「で、あの・・隣のクラスの、ほらあの子は」
真一が聞くと、稔がニヤニヤしながら、ドアの方に顔を向けた。
「本人に聞きなよ」

ドツドツ！
ドアが勢いよくノックされた。父さんが開けると、健太と正が飛び込んできた。後ろには、花束を抱えた少女が立っている。
「ほらほら」
稔が脇腹を突っついた。
「待合室でニュース見てたんだ。でも、本当よかった。真一が死んでしまったら、俺たち、どうしようかと思っていたんだぜ。なあ、正」
健太と正が、笑いながら手を突き出し、真一はその上を勢いよくはたいた。
「そしたら、健太の水筒のジュースの貰い手が一人減るってことさ」
「げっ」
いつもなら、このまま仲間と大いにはしゃぐ真一だったが、どうも

上手くできなかった。
「まだ、具合、悪いの」
正が心配そうに聞いた。
「そんなことないさ。もうピンピン」
「もしかして、俺たち、お邪魔なのかも。お父さんもお母さんも、稔君も。なあ、真一」
真一の目が、ちらちらと後ろを見ていることに気付いた健太が言った。健太は、正や父さんたちを外に押し出して部屋を出ていった。
「では、ごゆっくり」

部屋には、名前こそは知っているが、初対面と変わらない綾乃が残された。
「あいつ、何いってるんだ」
真一はドアを睨み付けながら呟いた。
「さっきは本当にありがとう。あなたに助けてもらわなかったら、私、どうなっていたかわからない」
「いや、大したことなかったよ」
体中の血が、顔に昇ってきた。
きっと茹で蛸のように、真っ赤になっているに違いない。せめて、ライオンに立ち向かった時のように、両手で握り込む棒があれば落ち着けるだろうに。残念ながら、そんなものはどこにもない。
『畜生、健太の奴。あいつになんて話さなきゃよかった』

実は、真一も、他の多くの男子と同様、綾乃に憧れていたのだ。
体育館での歌の練習の時に知ってから、ついつい隣の教室を覗くようになっていた。廊下で擦れ違うは、足がギックシャックとしてしまう。夏休みが始まったのは嬉しかったのだが、一方で綾乃の姿が見られなくなり、残念でもあったのだ。
健太と正には、そのことを打ち明けていたのだが、まさか、綾乃と二人きりになるなんて、ああ、神様・・・

「村井さん、怪我してるんだね」
綾乃の膝の絆創膏を見て、なんとか言葉を絞り出した。
「ええ、転んだ時に擦り剥いちゃったの。私だけよ、逃げ遅れたのって」
綾乃が小さく笑い、三つ編みにした長い髪がクルッと揺れた。
「うんうん、そうそう、その通りさね」
言葉を作る思考回路が、いかれてしまったようだ。真一は、自分でもおかしなくらいチンプンカンプンなことを言い、天井に顔を向けた。
「痛てて」
急に首の傷がズキリと痛んだ。
「ごめんね、私のために。ねえ、ゆっくり休んでね」
綾乃はそう言うと、花束を花瓶にさして部屋を出ていった。シャンプーのような甘い香りが残った。

入れ違いに、健太、正、それに稔がどっとなだれ込んできた。
「ねえ、ゆっくり、休んでね」
「おまえらな」
口を揃えて言う三人に、真一は首の痛みも忘れ、枕やら毛布を投げつけた。

4、港での見送り

動物園での事件から、二週間が過ぎようとしていた。
真一は、翌日には退院したが、それから四、五日は、テレビ局やら週刊誌の記者が、家に押しかけてきて大変だった。
さんざんカメラを向けられたり、インタビューを受けたりして、緊張しきりのしどろもどろ、それで、ようやく慣れた頃には、ぱたりと終わってしまった。世の中には、事件が多過ぎるようだ。一人の少年の勇気ある行動などは、一週間ほどしか話題に登らないのだ。
合間に動物園の園長も、お詫びの挨拶に来た。
真一の部屋の中は、園長が持ってきた動物クッキーやらヌイグルミで溢れかえった。クッキーは剣道部の仲間が・・その中心は健太だったが、二日とかからずに平らげ、ヌイグルミの殆どは、稔が自分の部屋に取り込んでしまったが・・・。
動物園は、事件のせいで、以前より入園者が減ってしまったそうだ。
園長の突き出した腹も、幾分凹んだように見えた。

お盆間近のその日、剣道の練習を終えた三人は、いつものように校門前の売店で、ベンチに座って休んでいた。午後の練習はなく、明日からしばらく部活は休み。三人はすっかりくつろいでいた。
「真一君、たぶん、お待ちかねのお客さん」
正が、遠くに目をやりながら言った。
ビニル棒のアイスを噛っていた健太は、氷の塊をゴクリと飲み干した。
「かー頭にツーンときた。確かにあれは、俺たちの熱い友情をさく、お客様」
「チッ」
言いたい放題の二人に舌を鳴らした真一の前に、軽やかに自転車が停まった。

薄ピンクのワンピースを着た綾乃が、麦藁帽子のつばを　ちょいと持ちあげている。
「やあ、どうしたの、買い物？」
真一が顔を赤らめながら聞くと、綾乃も恥ずかしそうに小さな声で答えた。
「お家に電話したら、たぶんここって聞いたの。ねえ、今夜、港で花火大会があるでしょう」
「うん」
「よかったら、一緒に行かないかなと思って・・」

「これって、デートの誘いってやつだよね」
正が、興味津々とばかりに目を見開いた。
「もち、いくいく」
健太が後ろから、真一の手を持ち上げた。
「こらあ」
真一は、二人の額をバチンと指で弾いてやった。
「あいたた、お邪魔虫は退散だ」
二人は店の中に逃げ込んでいった。

「花火大会か。小さい頃よく行ってた。でも村井さん、」
真一は、急に真面目な顔になった。
「今夜、あのライオンが港から出るんだよ。近くに行って、嫌な思いをしないかな」
例のライオンは、丁度、花火大会が始まるぐらいの時間に、船に乗せられて外国に送られる予定だった。ニュースでは、インドにある大きな動物園に引き取られることになったと伝えられていた。
「大丈夫。
本当のことを言うと、お目当てはあのライオンなの。日本を離れる前に、もう一度会いたくって。だって檻から出る前は、神様みたいに素敵だったし・・。

昨日もね、あのライオンの夢を見たの。大きな背中に跨ってとても楽しかった。平田君こそ、平気？」
綾乃が可愛らしく首を傾げた。
店の中では、二人が聞き耳を立てている。健太はいつの間にか、店の前に吊してあった飛び縄を頭に巻いて、綾乃のように首を曲げている。なんとかそれを無視して、真一は話した。

「へっちゃらさ。この前のことなんて、全然気にしてないんだ。噛みつかれたけど、本当に軽くだったし。実はね、僕も昨日、夢を見たんだ。船の甲板の上でね、あのライオンが『こちらにおいで下さい』って手を振ってた。それで今夜、船が出るところを見に行こうかなって思っていたんだ」
「それじゃあ、決まりね」
「うん、七時に、フェリー乗り場の前で」
綾乃は小さく手を振り、自転車を漕いで行った。
あの日から、綾乃は真一の家に、たびたび遊びに来るようになり、恥ずかしいながらも、普通に話ができるようになっていた。
後ろでは、健太と正が嬉しそうに抱き合っている。
「おまえら、絶対来るなよ」
真一は、目玉が飛び出さんばかりに二人を睨みつけた。
「いやーん、そんな目しないで」
「僕たちにも愛のおこぼれを・・」

港に停泊している船に、明かりが灯り始めた。
約束の七時には、まだ三十分余りあるが、すでに真一は来ていた。
母さんに慣れない浴衣を着せられ、首の辺りがムズムズしている。
ライオンに噛まれた傷は、白い瘡蓋（かさぶた）になっていた。
道沿いに立ち並んだ屋台から、トウモロコシやら、イカ焼きやらのよい香りが漂ってくる。花火見物の場所取りか、防波堤の上には、

何枚ものシートが敷かれている。
ずっと用心はしていたが、二人の悪友の姿は見えなかった。
「ちぇっ、気を持たせやがって」
一人、苦笑いしながら文句を言った。

やがて、小さな鈴と下駄の音が聞こえ、かすり模様の浴衣を着た綾乃が現れた。結い上げた髪の上で、銀色の飾りがきらきらと揺れている。
「あの貨物船に乗っていくのかな」
眩しそうに目を細めながら、船腹に外国の文字が書かれている船の方を向いた。
「ええ、たぶん。もっと近くにいってみましょう」
綾乃に手を引かれ、真一はもつれそうになる足を必死に動かした。
静かに打ちよせる波音に混じり、二人の下駄の音が軽やかに響いた。

赤い貨物船の船尾が、目の前に開いている。
浅黒い肌の髭を生やした男達が、聞いたことのない言葉を交わすなか、高く積まれた木箱が、次々とベルトコンベアに乗せられ、船中に送られていく。
「もう、積み込まれてしまったのかしら」
「ちょっと待ってよ」
真一は、積み荷をチェックしている日本人らしい男に歩み寄った。
「あのう」
顔を上げた男は、真一をちらりと見ただけ。こんな若造に付き合っていられるかとばかり、手にしたファイルに視線を落とした。ここで引き下がってはと、もう一度、口を開こうとしたところで綾乃が呼び止めた。
「平田君、あれ！」
見れば、幌付きの小型トラックが、曲がり角の向こうから走り込んできていた。横付けになった車体には、ジャングルの絵が描かれて

いる。
「動物園の車よ」
「間に合ったんだ」
ほっと息をついた真一の元に、車から降りた太い人影が近づいてきた。園長だ。もう一人降りたのは、飼育員だろう、荷台の後板を降ろしている。

「やあ、真一君。と、その可愛いお嬢ちゃんは。こいつはおみそれした、綾乃ちゃんだね」
「ライオンは、トラックに？」
真一は、艶やかな綾乃に気をとられている園長に聞いた。
「ああ、そうだよ。二人は、わざわざ見送りに・・」
園長は、不意に思い出したように、ポケットからハンカチを取り出し、目尻に光るものを拭いた。
「あいつは本当は、いい奴なんだ。後にも先にも、これっぽっちも悪いことはしていない。なのに、もうお別れなんて・・・おっとこれは失言だった。ごめんよ」
「いいえ」
二人は、顔を見合わせて微笑んだ。
「園長さんのおっしゃるとおりです。ライオンは何も悪いことをしていません。だから気にしないで」
園長の目から、大粒の涙がこぼれた。
「そう言ってくれるとありがたい。他の動物たちも、あいつが出る時に悲しそうな声を出して泣いていたんだ」
園長は、入園者を集めたというだけでなく、心底から白いライオンが好きになっていたようだ。

トラックの後ろには、フォークリフトがつけられ、穴が幾つか開いた木箱が出てきた。飼育員に寄り添われながら、丁寧にベルトコンベアに運ばれていく。

「○×△、○×△□」
急に、船の奥から声が響いた。穴の開いた木箱を端に乗せた途端、今まで、ゴロゴロと動いていたコンベアが止まってしまったのだ。

『お待ちしておりました』
真一の耳元で低い声が聞こえた。
「なに」
慌てて周囲を見たが、近くには園長と綾乃がいるだけだった。コンベアに目を戻せば、木箱の穴から、青い光がこぼれ出ていた。ライオンがこちらを見つめているのだ。
『もしや、今の声は』
真一は、青い光を見つめ返した。
『そのとおり、お若い剣士どの、そして巫女どの』
綾乃が震えながら、手を握りしめてきた。
彼女にも、今の声が聞こえたのに違いない。園長は、相変わらずハンカチを顔に当てている。声は、二人だけに聞こえたのだ。
『ワタシは今、お二人の心に語りかけています。
この体では、このようにしか話ができないのです。なんとも窮屈なのですが。ともあれ、夢の中の呼びかけに応えて来て下さり、ありがとうございます。
邪神あらわる所、剣士と巫女あり。あのように、お二人にお会いできるとは思いませんでした』
『夢って、あれは、君が見させたのか？』
『そうですとも。お休みのところ、誠に失礼いたしました』

「村井さん」
「ええ」
頷いた綾乃の手を引き、真一は木箱の前に駆け寄った。

5、守護獅子の言葉

『剣士とか巫女とか、それに邪神って・・いったい何のことを言ってるんだい？』
真一は小さく囁きながら　心で聞いた。

『やはり剣士殿はお忘れだったか。それに巫女殿も。確かに前回、お二人の魂とお会いしたのは、半世紀も過ぎた前のこと。それもいたしかたなし』

真一は綾乃と顔を見合わせるばかりだったが、二人に注がれる青い光はさらに強まった。
『邪神は、森羅万象、自然界の秩序が無目的に破壊され続ける時、姿を現します。宇宙にくまなく広がるエネルギー体が、秩序を破壊しようとするものを察知し、それを排除しようと、この地上の何処かに邪神を生み出すのです。
前回、現れた時、邪神は死せる大鷲のからだに宿っておりました。そして一人の人間を操り、人々の喜びや悲しみの心を奪って殺戮をさせ、最後には人々の内臓を啄んだのです。現れ方は違えども、邪神の為すことは、いつも同じこと』
『半世紀も過ぎた前って。もしや、その操られた人って、独裁者と呼ばれた人のこと』
綾乃が聞いた。
『操られた者の呼び名は知りません。その人間は、魔の力が失せた時、絶望と罪悪感に苛まれて命を絶ちました。
それはさて、邪神の負の力が現れようとする時、この地上の自然は、均衡を保つための正の力を生み出します。その力こそが【守護獅子】であるワタシと、あなた方が宿している剣士と巫女の魂なのです』

突然で、全くチンプンカンプンな内容だったが、綾乃は少しは解ったとばかりに軽く頷いた。
「まるで、人間の体みたい。おかしなことをすれば怪我をしてしまう。でも、それとは別に、怪我をした所は治ろうとする』
綾乃の呟きに、青い光は笑うように点滅した。
『おっしゃるとり。もととも人の体も、小さな宇宙であり、自然でありますからの』

『うーん。けど何故、僕が剣士で、村井さんが巫女なの』
真一が一番の引っかかりを尋ねた。
『ふー、お気づきになってはおりませんかな。あなた方は、普通の人とは、一部かけ離れたのをお持ちのはず。おそらくは、剣と、調べに関係したものを」
真一は、はっと気づいた。
特別な訓練をしたわけでもなく、めきめきと上達していった剣道。そういえば、物心つく前から、長い棒を振り回して遊ぶのが好きだったと、母さんから聞いたことがある。

「わたし、ずっと小さい頃から、音楽が得意だった。楽器は初めてのものでも、すぐに演奏できてしまうし・・それが、巫女の魂の力だったということ?」
「たぶん・・」
横を向いて見つめる綾乃の目に、真一は曖昧に頷いた。
周囲では、コンベアのチェックをするために、ばたばたと人が走り回っている。後ろにいる園長は、飼育員に慰められるように肩を叩かれている。

『それに、何よりの証拠は、』
一息ついたあと、ライオンは続けた。
『あなた方が、自然の語る言葉に耳を澄ます、純粋な心をお持ちに

なっていること。最近、変わったことはございませんでしたか』
『そういえば、僕、君のことが新聞にのった日に、頭のどこからか声が聞こえた。
《剣をにぎれ、邪なる者を討て》って。竹刀をふる形も、重い刀を振っているみたいに変わってしまったんだ』

『私は、居間にあるライオンの置物が話をしたように見えたの。《見つめよ、奏でよ》って。慌てて見返したら、普通の置物だったけど。それに最近、歌ったり、リコーダーを吹く時、息が長く吐けるようになって、喜んでいたの』
青い光が強く光った。
『お二人には、自然の現れであるワタシの声が届き、体は準備を始めました。ですから、剣士と巫女であることに違いないのです。そして、あなた方は、ワタシの前に来られた。ワタシは気配を感じて、檻の外に出ました。多くの人がいて、どの方かわかりませんでしたが、必ずや、お二人の魂を宿した方は、残られると信じておりました』

『村井さんが転んで、僕が助けようとしたこと？』
心に聞こえる低い声が笑った。
『思い違いをしておられる。お二人ともに、魂の導きによって、あの場に残られたのです。そして力を蘇らせた。覚えておられませんかな。剣士殿が振りかざした棒が、巫女殿に見つめられ、その歌声とともに、金色に輝いたのを』
真一は首を振った。
『何も覚えていない。ただ夢中で、君に打ちかかっていっただけだよ』
「私、見たわ」
綾乃が声に出して言った。
「平田君が跳びかかっていった時、確かにあのステッキは金色に光

っていた。これまで、私の見間違いだと思って黙っていたの」
『剣士殿の剣は、巫女殿の視線と奏でる音楽によって金色に輝きます。その輝く剣のみが、邪神を退治できるのです』
「だけど、私がこの町に引っ越してきたのは、お父さんが急に転勤するになったからよ」
「それって夏休み前のことだよね」
『全ては、森羅万象と、この地上に流れるエネルギーのバランスにより導かれたこと』
この言葉に、二人はただ黙って青い光を見つめるばかりだった。

「ああ、やはり、遠くで見送るなんてできやしない」
重い足取りとともに、園長が走り寄ってきた。
「まだ名付けてもいなかった美しいライオンよ。向こうに行っても達者で暮らせよ」
漏れ出す光は見えない様子で、木箱に優しく頬ずりしている。
『この人間は、ワタシが自然が生み出したものだとは気づいてはいない。しかし、とてもよい人間だ。何よりも動物たちを愛している』
『でも、君は行ってしまうのだろう。僕たちが、剣士と巫女だとしても、君のいう邪神が現れたら、どうしたらいいんだい』
真一は聞いた。
『邪神の負の力が消え去るまで、ワタシは地上に残ることになります。この体は、お二人の力を蘇らすために、かりそめに形作られたもの。役割が終われば、体は消え去るのです』
言葉が終わるのと同時に、これまで強く光っていた青い光が、薄い緑色に変わり、やがて消えた。
止まっていたコンベアが動き始めている。木箱は軽く揺れながら奥に見えなくなった。
「体が消えても残るってどういうことかしら。それに、これから何

が起こるの」
「・・わからない」
綾乃の問いかけに、真一は小さく首を振った。

港では、地面を揺るがす爆音が轟き始めている。
夏の夜空を埋め尽くさんと、大玉、スターマイン、しだれ・・・色とりどりの花火が次々と打ち上げられた。

6、学校に落ちた隕石

その夜、真一は遅くまで起きていた。
時間は、とうに〇時を過ぎているだろう。けど、体が熱くてたまらなかった。先日、取り付けられたばかりの冷房で、部屋をギンギンに冷やしても眠気はやってこなかった。代わりに稔がやってきて、ベッドに乗り込んで、そのまま寝てしまった。
熱さの原因は、夕刻、白いライオンから聞いた言葉・・。それがべったりと頭に張り付き、離れなくなっていたのだ。
『人の心を奪い、しかもその体を食べる邪神が現れる。それと戦うために僕がいる。村井さんがこの町に引っ越してきたのもそのため。いったいどうなってる・・』
今は、高ぶった気持ちを落ち着かせようと、玄関で竹刀を振っていたところだった。

ジリリリリーン　ジリリリリーン！
いきなり、廊下の電話が鳴った。
引きつるような手で受話器を取ると、震える少女の声が聞こえてきた。
「平田君？」
「うん、村井さん、だよね」
思いもかけない相手だった。
「どうしたの、こんな遅くに？」
「ごめんね。でも、どうしても話したいことがあって・・。
私、眠れなくて、ベランダに出て空を見ていたの。そうしたら、急に輝くものが空に生まれて、流れ星みたいにこの近くに落ちたの。たぶん、学校あたりだと思うけど。もしかしたら、あれがライオンがいっていた邪神なのかもしれない。ねえ、どうしたらいい」

取りとめもない質問だった。いや、そうであって欲しいものだった。
真一は、できる限りゆっくり話をした。
「村井さんの見た通りかも知れない。でも大丈夫だよ。ほら、耳を澄ましてごらんよ。なんのサイレンも聞こえてこない。もし、邪神とかだったら、きっと町中、大騒ぎだよ。朝になったら学校に行ってみようよ。そうすれば、はっきりするよ」
「そうよね」綾乃の声は、少しほっとしたようだった。
「とにかく今日は寝ないと。こんな心配性だったなんて、私、自分でも知らなかった。お休みなさい」
「そんなことないさ。僕だって起きてたんだもの。でも、もう寝ないとね。お休み」
受話器を置いた後、治っているはずの首の傷がじんじんと痛みはじめた。
鼓動が早くなり息苦しくなっている。綾乃を安心させるための言葉だったが、実際の所、邪神など見たこともない自分に、何も言えるはずがなかったのだ。

「なんだ、まだ起きていたのか。さっき、電話が鳴ったみたいだが」
二階から父さんが降りてきた。
「うん、間違い電話だった」
真一は嘘をついた。
夕食の時に、ライオンの言葉を聞いたことを話しても、父さんは信じてはくれなかった。母さんは「この子、病気かしら?」と心配そうに顔を見つめた。稔は「兄ちゃんなら、カラスの言葉だってわかるよ」とけらけら笑っていた。
だから、「邪神が来たのかもしれない」などと話しても、尚更に信じてもらえるはずがなかったのだ。
「こんな夜中に間違い電話か、迷惑なこった。
真一・・素振りもいいけど、早く寝るんだぞ」
父さんは、ぼりぼりと頭をかきながら、二階に戻っていった。

「村井さんも眠れないだろうな」
首の瘡蓋を撫でながら、天井に鈍く光る電球を見つめた。

翌日、ほとんど眠れないまま起き出した真一は、食事をとると、さっそく学校に向かった。
夏休みだというのに、校門の向こうには多くの人だかりが見えた。
校庭の入口には、ロープで仕切りがされ、「関係者以外立入禁止」と書かれたプレートが下がっている。いったい、何が行われているのだろうか。
見物人を押しのけて前に出ると、三台のショベルカーが、唸りをあげて土を掘り上げていた。近くで作業している人は、皆、白いのカッパのような服を着込んでいる。
「放射能防護服だわ」
いつの間にか、隣に綾乃が立っていた。
「昨日の電話と関係があるの？」
真一が聞くと、綾乃が心配そうに答えた。
「あれは、やはり校庭に落ちたのよ。それをああやって、掘り出しているんだわ。
もしあれが流れ星、いえ、隕石で、放射能をもっていたら危険でしょう。だから、あんな服を着ているのよ」
『村井さんって、音楽が得意なだけでなくて、いろんなことを知ってるんだ』
真一は感心しながら改めて綾乃を見た。
「やっぱり隕石だったのかしら。ならいいのだけど」
Tシャツ姿の綾乃は、硬い表情のまま校庭を見つめている。

「よっ、ご両人。昨日の花火大会は、さぞかし、きれいだったでやんしょ」
囃し立てるような声とともに、真一の肩を叩いたのは健太だった。

すぐに、正もやってきた。
「朝のニュースで言っていたよ。学校に隕石が落ちたって」
正が言うと、健太は少しむくれ顔になって言った。
「まったく神様は容赦なしだよな。俺らのささやかな実験さえ、台無しにしてくれるんだから」
「実験って」
「昨日、真一君が先に帰った後でね・・」
問いかけた真一に、正が答えた
「僕ら、売店の軒先でアリジゴクを見つけたんだ。それで広い所でも巣を作るか試そうと思って、校庭の真ん中に置いたんだ。ほら、穴を掘っているあそこら辺」
「そこに隕石がドーンだよ。まったく」
肩をすぼめる健太の一方、正は隕石の方に興味があるらしく、明るい目をして校庭を見つめている
「まあ、自然現象には逆らえないよ」
真一は友人の太い肩を、宥めるように撫でてあげた。

しばらくして、ガタピシと動いていたショベルカーが後ろに退き、シャベルやらを持った数人が、深く掘り込んだ穴に入った。
「もう少しで掘り出せる」
正が興奮ぎみに息を荒立てた。健太は、重い体を真一にもたれかけ、眠たそうに半目状態になっている。
四人の周囲で、がやついていた人々が静まり返った。
・・もしや、白いライオンの言っていた邪神が出てくるのではないか！・・
真一と綾乃の目が大きく開かれた。

マジックハンドのようなものを持った人が、慎重に穴から出てきた。その先には、小さな塊が挟まれている。さらに数人が、それに黒い箱を当てている。

「ガイガーカウンター」
また正が呟いた。勉強が得意な正は、特に理科には目がないのだ。
「放射能があるのか、調べるのね」
隕石を調べていた人が、見物人に向かって手を振った。
「宇宙からの贈り物です。危険な放射能は出ていません」
防護服の頭部を外しながら、喜びの声をあげた。
どっと拍手が沸き起こった。真一と綾乃は、ほっと胸を撫で下ろした。
「あー、ただの石ころ相手にそんなに騒がなくても」
健太がつまらなそうに首を振った。
「家に帰って、もう一回、寝ようっと」
「隕石だってすごいことだよ。地球にはない未知の鉱物が含まれているかもしれないんだ。もしかしたら、それで宇宙創造の謎が解けるかもしれないよ。何もなくても、どこかの博物館に展示されるはずだよ」
正は、もっと見たいとばかりに背伸びをしている。

それから間もなく、掘り出したばかりの隕石を載せた車が、横を走り過ぎた。
「今の見た？」
綾乃が小さく聞いた。
「うん、車に乗っている人たちの顔だよね。何か変だった。さっきまで、あんなに喜んでいたのに」
真一は首を傾げた。
窓の中に見えた人は、まるで、面でもかぶっているかのように、にこりともせずに、ただじっと前を見据えていたのだ。悲しい事件が起こったわけでもないのに、もう少し、愛想を振りまいてもよいはずである。
綾乃が、そっと真一の手を握った。
「人々の喜びと悲しみの心を奪う邪神」

真一は呟きながら、その手を握り返した。

「ちょっと、家に来てほしいんだ」

校門に向かう途中、真一は三人に声をかけた。その真剣な顔に、三人は何も言わずに頷いた。

7、夜の博物館

中学校に落ちた隕石のことは、全国はもとより、地元のニュースでも小さく報道されただけだった。町なかに隕石が落ちるなど、珍しいことではあったのだが、被害は全くなく、話題性は低かったのだ。

翌日の夜、同じく地元で起こったこととして、ずっと大きく取り上げられた事件があった。学校から十キロほど南にある原子力研究所から、放射能防護服の頭部が、二つ盗まれたのだ。

研究所のロビーに、今は使われていない古いタイプの服を、見本用に吊してあったのだが、頭部だけを盗むなど。一体、何のために使うというのだろう。

『誰かが極秘に核実験をしようとしているのだ』などという噂も流れたが、あまりにも中途半端である。それに歴史的な価値があるというわけでもない。では、いわゆる風変わりな収集家の仕業だろうか・・警察も研究所員も首を傾げるばかりだった。

「おおっ！」

隕石が落下してから三日たった朝のこと、新聞を読んでいた真一の父さんが、急に大声を出した。朝食を食べていた真一と稔は、ぎくりと顔を上げた。

「ほら、新聞に書いてある。先日の隕石が、もう、展示されるんだってさ。それもこの町の博物館に」

「それって、きらきら光ったりするの」

稔が聞いた。

「いや、鶏の卵ぐらいの大きさで、鈍い黒色だとさ」

「そんなの、工事現場にごろごろしてるよ」

『・・もう展示することになった・・』

稔は素っ気なく言ったが、真一の胸には、何かが引っかかった。

「父さんな、ずっと前から、こんな時を待ってたんだ。子供の頃、大阪で隕石博覧会があって、なんと無人の探査衛星が小惑星から持ち帰った石も展示されてたんだ。けど見に行けなくて、とても残念だったんだ。
でも今度は行ける。夜の九時まで博物館は開いてるらしい。それに初日の来館者に限り、入館料は無料、十万円分の商品券が当たる抽選もあるらしい。今夜、さっそく家族で見に行こう。なあ、母さん」
立て続けにしゃべる父さんの目は、少年のように輝いていた。台所で洗い物をしている母さんが、笑いながらカウンターを覗き込んだ。
「私、その宇宙の石を見たけど、やっぱり、その辺に落ちている石ころと変わらなかった。それより、展示場を出た時に食べたアイスクリームの美味しかったこと。そっちの方がよく覚えているわ」
「そりゃ、そうだろうけど、今度の隕石には、魔法の力があるかも知れないんだぞ」
父さんは、なんとか真一や稔の関心を引きたいようだったが、稔の返事は、
「うん、僕も行きたい！だから帰りに、アイス買ってよ」
と、相変わらずつれないものだった。
「真一、おまえならわかるだろう、男のロマンってやつを」
「わからないこともないけど・・」
真一は、胸に引っかかっていたことを口にした。
「正が言っていたけど、隕石を発見したら、その成分を分析するのに一ヶ月はかかるって。でも、まだ三日しかたっていない。ちょっとおかしくない？」
「なんだよ、おまえも男のロマンがわからないのか。
しかし、確かに正君の言う通りだ。早過ぎるといえば早過ぎる。うーん、いやいや、きっと博物館の館長が、特別に計らってくれたんだよ。もしかしたら、調べるのは展示時間の後にするのかもしれないじゃないか」
結局、何を言っても、父さんの勢いは止まらなかった。

「ねえ、お父さんの男のロマンというものに、付き合ってあげましょうよ。それに十万円分の商品券の抽選があるなんて、主婦としては絶対見逃せないわ」
母さんが目玉をくりっと回して言った。
「それでこそ僕の選んだ女性だ。じゃあ今夜、仕事から帰ってきて、八時に出かけよう」
父さんはほくそえみながら、自分のウインナーを真一と稔の皿に転がした。
「ウインナーじゃなくて。アイスクリーム、ぜったい買ってよ」
強くせがむ稔の横で、真一はしぶしぶと頷いた。
「ついでに僕のお願いも聞いてくれる？」
「なんだ、小遣いのことか。それは母さんとも相談しないといけないんだが」
「ううん。大したことじゃないんだ。博物館に行った時にしてほしいことがあるんだ」
もじもじ言う真一に、父さんは拳を握って腕を突き出した。
「おう、なんだって大丈夫だ。裸で逆立ちだって、オッケーだぞ！」
「そんなの、わたしは絶対いや」
そう言いながらも母さんはクスクスと笑っていた。

その夜、父さんは八時十分前に帰ってきた。
そのまま一人分残してあった夕食をかきこみ、化粧を直している母さんを「早くう」とせっついた。
家族の外出で約束の時間通りに行動するなど、滅多にないことだったが、八時ジャスト、車はエンジン音も高らかに博物館に向けて出発した。
「ほれほれ、博物館がお迎えしてるぞ」

ハンドルを握る父さんの言葉通り、夜の博物館は、遠目からでも目立つほどに、煌々と明かりがついていた。
駐車場には職員が立ち、ひっきりなしに訪れる車の整理に追われていた。
商品券の抽選のお目当てもあるだろうが、それこそ、町中の人が来ているようだ。駐車場から歩いていく途中では、近所の人や学校の友人、他にも何人もの見知った顔と出会った。
『なにか、おかしい』
真一の胸に抱いていた不安が大きくうねりだした。
点々と続く照明の下、人々は、ただトツトツと帰り道を歩いていったのだ。まるで、命のないマネキン人形のように。

「おっ」
「やあ」
建物の入口の回転ドアの所で、健太の家族と擦れ違った。恥ずかしそうにお辞儀をしながら通り過ぎていく。振り返れば、健太はガッツポーズをしていた。
「おい、真一、さっきの木沢君の家族だろう。なんで皆、サングラスなんてかけてるんだ？」
父さんが不思議そうに聞いた。
「そのことなんだけど」
真一は頭をかきながらも、手に持っていた小袋からサングラスを取り出した。
「僕、健太たちと約束してしまったんだ。隕石を見ることがあったら、家族皆にサングラスをかけさせるって」
「はぁ、また妙な約束をしたな。それが今朝、言っていたお願い事ってやつか」
父さんはがくりと膝を落とした。
「父さん、言ったよね。裸で逆立ちしてもいいって」
「確かになあ。まあ、仕方ないか、友だち思いのおまえの約束だも

んな。なあ、母さん」
母さんは、どこでサングラスなど手に入れたのかと疑いの目を向けたが、そのいかにも手作りのような不格好さに、ひとまず安心したようだった。
「兄ちゃん、これ、格好いいよ。それによく見えるしさ」
さっそくサングラスをかけた稔は、Vサインを出しながらはしゃぎはじめた。父さんは腰に手を当て、母さんと顔を見合わせている。
「どうだ、まんざらじゃないだろう。母さんもいけてる」
そのまま父さんは、母さんの手を握り、さっそうと歩き始めた。
「まるでスパイ気取りだね。映画の観すぎ」
けらけらと笑った稔は、小走りに先頭を切った。
「こらこら、走ってはいけませんよ」
恥ずかしさのためか、いつもとは違う上品な母さんの声が廊下に小さく響いた。

真一は胸を撫で下ろした。
『健太はうまくやったんだ。正と村井さんも、うまくいけばいいけど』

実は、真一が配ったサングラスは、盗まれた放射能防護服の頭部についていたものだった。謎の犯人は、真一と綾乃、それに健太と正だったのだ。
しかし何故、そんなことを。これにはしっかりとした理由があった。隕石落下の朝、真一は、家に寄った健太と正に、白いライオンから聞いた邪神のことを話した。
「なんまいだい、なんまいだか・・・」
健太は怪しいお経を唱えながら、頬をひくつかせた。
真一の話だけなら、全くの夢物語と笑い飛ばされただろうが、横には、真剣に頷く綾乃もいたのだ。正は邪神のことは信じていないようだったが、やはり、隕石を掘り出した人たちの様子が妙だった事

に気づいていた。
もちろん、剣士と巫女については黙っていた。もし話したら、健太と正は二人を冷やかして、真面目に話を聞かなくなっていただろうから。
「それで、気づいてしまった僕たちは、何をするべきかなんだけど」
「大人に相談しましょうよ」
「そんなの信じてくれるわけないよ」
「まずは、自分たちを守ることが肝心だよ」
あれこれ話し合った結果、将来のために、準備しておくことになったのだ。
校庭から隕石を掘り出した人たちは、防護服をかぶっている時には、喜びの声をあげていたのに、車に乗って帰る時には、全く笑っていなかった。触っていないはずの人も皆だ。

【隕石を近くで見る時は、防護服のゴーグルを通して見ないといけない！】

とりあえず出たこの結論から、さっそく頭脳派の正を、原子力研究所に行かせて下見をさせ、翌日、他の三人が、見学者に混じって防護服の頭部を盗んできたのだ。
次第はこうだった。
ロビーにいた見学者が移動したところを見計らい、健太が派手に水筒のジュースをこぼした。「まあ、たいへん」と受付のお姉さんが、モップを取りに行っている間に、真一と綾乃が、そそくさと防護服の頭部を外し、荷物置き場に置いておいた大きめのバッグに押し込んだ。そのまま、何くわぬ顔をして他の見学客に混じり、見学が終わって、そのままバッグを持ってバイバイしたというところだ。
あまりにも簡単なことだったが、それほどに、防護服には注意は払われていなかった。それに、ゴーグル型の黒いビニルをはった白い紙袋を、代わりにかぶせておいたのも効果を発揮したようだった。

事件が発覚したのは、その日の夕方、警備員が見回りに来た時だったという。
そして「夏休みの共同製作なんだ」と、車の修理屋をしている健太のお父さんを騙し、工場の機材を借りてゴーグルを加工し、サングラスを作ったのだ。
隕石を見なければならなくなった時に備えてのことだったが、こんなにも早く、その時がこようとは・・
先ほどのガッツポーズを見る限り、健太はいつもと変わりなかった。やはり、サングラスを通して見れば大丈夫なようだ。

「おや、杉山さん。こんばんは」
廊下で父さんが、隣家の杉山さん夫妻に挨拶をした。いつもは愛想のいいおじさん、おばさんだが、こちらをチラリとも見ず、そのまま通り過ぎていった。
「こんなサングラスかけてるから、気づかなかったんだ」
父さんがぶつぶつと言った。
「あれ？野山さんに、井口さん・・」
母さんも首をひねっている。ウォーキング仲間の二人も、素知らぬ顔をして通り過ぎていったのだ。いつもなら、出会ったら最後、三十分はしゃべり続けるというのに。
それから一旦、サングラスを外した真一の家族は、何人もの知り合いにお辞儀やら声かけをした。しかし、皆、ただ前を向いて歩いていくだけだった。
博物館から帰っていく人は、誰も笑っていなかった。面を付けたように硬い顔をして歩いていくばかり・・四人の推測は正しかったのだ。
「真一、これに何かあるな」
サングラスを指で弾きながら、父さんが真面目な声で言った。
「いつも通りなのは、こいつをかけていた木沢さんの家族だけだ。後で説明してくれよ。母さんに稔、真一のくれたサングラス、きち

んとかけて、絶対外しちゃだめだぞ」
「了解しました！」
稔が額に手を当てて返事をした。
「さすがだよ。気づいてくれたんだね」
真一が言うと、父さんは頷き、ますます背筋を伸ばして歩きだした。
「映画の観過ぎじゃん」
ちゃかす稔の手を、不安そうに口をすぼめた母さんがぎゅっと握った。

四人は　流れ星のマークのついた矢印に沿って廊下を進み、二階の大ホールに入った。入口にノートがあり、見学者は名前と住所を書くようになっていた。気づかずに通り過ぎようとすると、
「記入された名前の番号で、商品券の抽選を行います、どうぞお忘れなく」
係員が記入するように指示していた。
「あれで、来館者の名簿を作れる」
「来館していない人のチェックにもなる」
真一のつぶやきに、父さんが付け足した。

体育館のように広いホールの真ん中に、隕石は展示してあった。新聞記事に書かれていた通り、鶏の卵ぐらいの大きさで、少しでこぼこしていた。スポットライトを浴び、不気味に黒く光っている。前に並んでいた若いカップルは、肩を寄せ、幸せそうに微笑み合っていたが、隕石を見た途端、それまで組んでいた腕をほどき、その顔は凍りついたように硬くなった。
「兄ちゃん、あれ、恐竜の卵みたいだ」
稔がこそりと言った。

真一たちは気付かなかったが、家族連れ添ってホールを出た四人の後ろで、係員が名前を記入したノートに何かしらを書き込んでいた。

8、心を奪われた人々

帰りの車の中、助手席の母さんが振り返った。
「真一、何をやったかきちんと話しなさい。それにこのサングラスはどうしたの？」
母さんは、真一がとんでもないことを　やらかしたものと思っているようだった。
「まあ、ちょっと待て。車なんか運転していたら、ゆっくり話が聞けない。家に帰ってからにしよう」
父さんが笑いもせずに言った。
残念ながら、稔は、お目当てのアイスクリームを買ってもらえなかった。

帰宅して、すぐに父さんは電話機の前に向かった。
「母さん、確かめたいことがあるんだ。真一と稔のクラスの名簿を持ってきておくれ。話を聞くのはそれからだ」
父さんは、透明ファイルに入った名簿を見ながら、次々と電話をかけていった。
「いつもお世話になっています。お子さんと同じクラスの平田と申しますが・・・」
言葉じりは愛想よいのだが、顔は真剣そのものだった。数字を押す指先は、硬く緊張している。父さんが何を確かめているのか、真一はもちろんだが、母さんも半ば気付きはじめていた。

「で、どうだったの」
一通りかけ終わった後、母さんが聞いた。父さんの顔は辛そうに歪んでいる。
「三件だけだったよ。人間らしく笑いながら話をしてくれたのは。

稔のクラスは、皆だめだった」
何もわかっていないはずなのに、稔の顔が今にも泣きそうにこわばった。
「三件って？」
「ええと、木沢さんと田中さん、それにあの」
「村井さん」
真一は息せき切って言った。綾乃は隣のクラスだが、欄外に電話番号が書き足してあったのだ。
「そう、他の人たちは皆、冷たく話をするだけだった。担任の先生も。さあ、真一、サングラスの秘密を話しておくれ」

事態は深刻さを増していた。
おそらく殆どの町の人が、隕石を見て心を失ってしまっているに違いない。もはや、秘密だとか、どうせ理解してもらえないなどと言っている場合ではない。
「話は動物園での事件に戻るんだけど・・」
真一は全てを話した。さすがの母さんも黙って聞いていた。
「うーむ、僕は、おまえの話を信じるよ。きっと、あの隕石からは、機械では検出されない人の心に作用する放射能みたいなものが出ているんだ。しかしだ・・」
大きく頷いた父さんだったが、同時に腕を組んで唸った。
「隕石とライオンから聞いた話は、どう関係するのだろう。あの隕石が、邪神とかいうものと思えないしな」
「やっぱり、あれは卵なんだ。兄ちゃんのいう邪神が、あの中から生まれてくるんだ。最初に、人間の心を吸い取っているんだよ」
「そんな怖ろしいこと、言ってはだめ！」
強く言った母さんが、父さんに視線を投げた。
「私、気持ちが悪い。本当に真一の話したことが起こりそう。ねえ、今夜からでもいいから、広島のお祖父ちゃんの家に行きましょう」
「むう・・」父さんは腕を組んだままだ。

「母さんの気持ちはよくわかる。しかしだ。もし邪神が出てきたら、誰がそいつと戦うんだ。白いライオンは、真一と村井さんが邪神を退治する剣士と巫女だと言っていたんだろう」
「何言ってるのよ！そんなの警察とか、自衛隊に任せておけばいいじゃない」
泣き始めた母さんに、顔をしかめながら父さんは真一を見つめた。
「僕だって、どうしていいかわからないよ」
真一は小さくつぶやいた。

その時、チャイムが鳴った。
夜の十時を過ぎているというのに、誰が来たというのだろう。涙を拭いながら、母さんが出ていった。
と、玄関から、叫びともつかない小さな声。
「二人とも絶対に来るなよ。何かあったら、南の窓から逃げるんだ」
言いながら父さんが走っていった。
「兄ちゃん、どうしよう」
稔が真一にしがみついてきた。
「落ち着け、父さんがなんとかしてくれる」
真一は、稔の手を引いて窓に向かい、雨戸のシャッターを半分引き上げた。
『いざとなったら、稔を連れて逃げなくては！』
爆発しそうな胸の鼓動を感じながら、真一は玄関に耳を傾けた。
乱闘が起こっている様子はなく、静かな声が交わされている。やがて、部屋のドアがゆっくりと開いた。
「父さん、だいじょう」
言いかけた口が止まった。
差し出された父さんの手には、ここにあるはずのない丸い物が乗っていた。そして、その顔は・・・
「稔、見ちゃだめだ！」
真一は、稔の目を塞いだ。小さな体が硬く抱きついてくる。

「兄ちゃん、隕石、見なければだめだよ」
抑揚のない冷たい声が聞こえた。
視線を下げれば、稔の顔は、前に並ぶ両親と同様に表情をなくしていた。まるで三体の蝋人形がじっと見つめているようだ。
「やめてくれ」
稔を振り解いた真一は、捕まえようと伸びてくる三人の腕の下をかいくぐり、玄関から走り出た。雨戸を開けていたことなどは忘れてしまっていた。
外の通りには、博物館のワゴン車が止まっていた。その横を走り過ぎた時、ギュルルとエンジンをかける音が聞こえた。逃げようとする真一を、車で追いかけてきたのだ。

真一は、家々の間の用水に蓋をした小道に入った。すぐにも、急ブレーキを踏む音が聞こえた。そのまま、ひたすら走り続け、道の先に深い切れ込みが見えた所で振り返った。優に十人を越える人々が、あとを追いかけてきていた。中には父さんの姿も見えている。
「くそう、父さんまでやられてしまうなんて。それに母さんと稔も」
走りながら、唇を強く噛んだ。

間もなく、黒く流れる用水とぶつかった。幅は七メートルあまり、とても飛び越えられるものではない。それに大人の背丈よりも深く、両端はコンクリートで崖のように固められている。
「どこだどこだ」
真一は、人の住んでいない家の生け垣の下をまさぐった。
「あった」
手に触れた棒切れを引き抜いた。棒には紐が結わえてある。それを引きながら用水に浸かっていた太いロープをたぐり寄せた。ロープの先は、向こう岸に生えた楠の高い枝に結ばれている。強く握って後ろに数歩さがり、そのまま足を持ち上げた。
ロープは振り子のように用水の上を流れ、真一は、少し高くなった

向こう岸の壁に、したたか体を打ちつけた。痛いなどといっている間もなく、ロープを登り、反対側の岸にたどりついた。
大人たちには内緒で、健太らとターザン遊びをした場所が、こんなふうに役立つとは思ってもいなかった。元の岸には、追いかけてきた人々が集まっている。

「真一、何故逃げる。皆で我らの神が生まれる準備をしよう」
父さんが冷たく呼びかけてきたが、返事をすることもなく向き直り、また走りだした。

9、逃げる二人

真一はなるべく人通りのない裏道や、畑の中を選んで歩いていた。途中で気づいたのだが、靴を履いて出るのを忘れていた。コンクリートやアスファルトの道はまだよかったのだが、砂利や枯れ草の上を進み、足裏は血だらけになっていた。
普段なら拷問のような痛みに、歩くことさえできなかっただろう。しかし、そんなことに構ってはいられなかった。たとえ這いつくばってでも、安全な場所に行かなければならなかったのだ。

いつの間にか、中学校の裏門の前に来ていた。激痛に苛まれる足を、おそるおそる下ろしながら重い鉄門を引いた。
「何か履かなくては」
表にまわった真一は校舎の入口に手をかけた。幸運なことに扉の鍵は開いていた。隕石を見にいった学校の先生が、鍵当番を忘れてしまったのかもしれない。中に入り、非常灯の薄緑の光の下、自分の靴箱を探した。

「！」
不意に、黒い影が目の前を横切った。彼から逃げようとするその影は、怪我をしているように足を引きずっている。
「村井さん？」
思い切って聞いた。
「平田君なの？」
暗がりから、綾乃の声が返ってきた。
「よかった。普通の人は、もう誰もいないのかと思ってた」
声を押さえて泣きじゃくる綾乃の荒い息が、淀んだ廊下の空気に消えていった。

「君の家族も、あの隕石に？」
綾乃が泣きやんだところで、真一は聞いた。
「うん、寝る前にチャイムが鳴って、お父さんが出て」
「普通の人は、誰もいないって言ったけど、健太と正は？」
「だめ。私を追いかけてきた人の中に、二人ともいたの」
「畜生！サングラスまでは、うまくいっていたのに」
真一は近くにあったスリッパを壁に投げつけた。
「ねえ、落ち着いて」
綾乃が優しく真一の肩に手を置いた。
「私、あの隕石を、サングラスもかけずに目の前で見たのよ、それでも、何も変わっていない。おかしくない？」
「そういえば、僕もそうだ。ちらりとだけど、父さんの手の上に載っているのを見た」
「あのライオンのいっていた通り、私たちが、巫女と剣士の魂を宿しているからかしら」
「そうなのかもしれない」
真一は小さく呟いた。

「さて、まずはお互い、傷の手当てをしなくちゃね」
傷ついた足をそっと伸ばした真一を見て綾乃が言った。綾乃も裸足で家を飛び出してきたらしく、歩く度に沈痛な息を漏らした、二人は綾乃のクラスに忍び込み、先生の机の引き出しを引いた。
「あったわ」
綾乃が救急箱を見つけ出した。
「さすが、巫女様」
「こんな時にちゃかさないで。うちの担任、頭痛持ちだから・・もしかしたら薬も」
綾乃の推測のとおり、救急箱には怪我の応急セットに加え、鎮痛剤も入っていた。二人は苦みのある錠剤を口にし、痛みを堪えながら足裏を消毒し、包帯を巻いた。

「う、きつー」
下駄箱の前で、自分の上靴を履こうとした真一が呻いた。厚く巻いた包帯のせいで自分の上靴が入らなかった。
「そうだ！健太のにしよう。あいつの洗ってないから臭いけど」
隣で綾乃がくすりと笑った。既に上靴を履いている。不格好な大きさからすると、男子のを借りたのかもしれないが、あえて聞く必要もなかった。

タタ　タタタタ・・
外に、足音が響いた。
廊下に戻って、そっと窓から覗くと、四、五人の大人が、懐中電灯で道路を照らし、頷き合っていた。
「私、あの道を通ってきたの。あの人たち、私の血の跡を見つけたのに違いないわ」
「もうすぐ来る。ここを出なくては。村井さん、僕についてきて！」
二人はこそりと校舎を出た。
裏門を抜け、すぐ横の小道に入り、学校の西側にある寺の境内の階段を登った。裏手には、荒れ山へと伸びる道が続いている。

振り返れば、校舎の中に幾条もの光が走っていた。真一は、綾乃の手をしっかり握りしめながら暗闇を進んだ。
「ねえ、ここって幽霊が出るっていう噂がある山でしょう。草とか生え放題だし、危険だから登ってはいけないんだよね」
綾乃が息を切らせながら聞いた。
「だから、誰も、僕らがここにいるなんて思わないさ」
真一は落ちていた木の枝を拾い、道の先を叩きながら進んだ。この季節、もしや蝮などの毒蛇がいるかもしれないのだ。おかげで顔の方は無防備になり、綿あめができるかと思うほどに、蜘蛛の巣に引

っかかることになった。
「去年、ここに登ったんだ。幽霊なんていなかったし、それに頂上には、見晴台もあるんだ。ほら、足元に気をつけて。土や草に埋もれているけど、石の階段もあるんだ」
真一は、転びそうになる綾乃の手を力強く握った。
鎮痛剤が効き始めたとはいえ、荒れた山の登り道、包帯の内側で足の痛みがぶり返してきた。おまけに膝がガクガクと揺れだした時、坂は終わった。低い雑草の伸びた石畳の奥に小さな社があり、二人はその軒先に座った。

見上げた空には、星が瞬いていた。東の彼方には、黄色い満月が顔を出したところだった。
「ねえ・・・」
綾乃が口を開いた。
「うん？」
「私、こんなに月や星が綺麗だったなんて知らなかったわ」
「いつも見ていたはずなのに」
真一は頷いた。
「下界で起こっていることなんて、全然関係ないみたいだ」
「ほら、あの月の模様。よく見ると本当にウサギがいるみたい。小さかった頃、私、月にウサギがいて、餅つきしているって信じていた。いつだったか、そんなこと忘れてしまったけど」
「うん、僕も」

真一は何年も前に見ていた十五夜の月を思い出した。あれは小学の低学年の頃だっただろうか・・
・・皿に盛った白い団子の上にかかるススキの穂が、黄金色に光っていた。丸い月を見上げる父さんたちの目は、普段と違って神秘的に輝いていた。
『月見団子はな、月の光を浴びながら、〈今年もたくさんのお米が

取れました。自然の神様ありがとう〉って言ってから食べるんだ。
そうすると、月に住んでいるウサギが喜んで、飛び跳ねながらお餅をつくんだ・・』
どこか遠くで、微笑みながら話す父さんの声が聞こえたようだった。
無論、本当のことではないことはわかっていた。でも、きっとそうなんだと信じてもいた。いつの間にか、頬に涙が流れていた。

「確か、あのライオンは言っていたわ。邪神は、森羅万象の秩序が破壊され続ける時に現れるって」
綾乃が、空の景色に言葉を重ねるように言った。
「僕たちは、大切なことを忘れてしまっていたのかもしれない」
「もしかしたら、邪神って、それを思い出させてくれるものなのかも」
「でも、そいつに食べられたら、たまんないよ」
真一は手の下にあった小石を、暗い空に投げた。
「ライオンは地上に残るって言ったわ。きっと大丈夫よ」
「そうだ。守護獅子とか言っていたけど。こら！隠れてないで出てこい」
怒った声に、草むらで鳴いていた虫たちの声がぴたりと止まった。

１０、現れた邪神

荒れ山に日がさし、二人は眩しさのなかで目を覚ました。
溜まっていた疲れと、急に緊張がほぐれたせいか、深く眠ってしまったようだ。
足の痛みが軽くなっている一方、蚊に刺され放題となり、顔も体もでこぼこで痒くてたまらなかった。
「村井さんのおでことほっぺ」
「平田君だって」
二人は互いのひどい顔を見て笑い転げた。真一があまりにも笑うので、しまいに綾乃は怒った。
「おかしくても、限度ってものがあるわ！」
「ごめんごめん、ぶっ」
我慢できない真一の頭に、硬いげんこつが落ちた。

「それで、これからどうする？」
真一は綾乃の問いには答えないで、崖に突き出した岩に跳び乗った。
岩の端には、すっかり錆びついた鉄の杭が打たれている。
「村井さん。こっちに来てごらんよ」
「まあ！」
怖々と岩にのった綾乃が小さな声をあげた。

眼下に広がる町が、可愛らしい箱庭のように見えていた。
・・手の平に乗るほどに見える大小様々な建物の中で、普段なら、人々がそれぞれの日々を送っている・・当たり前のことだが、とても不思議で大切なことのように思えた。
しかし残念ながら、箱庭の町は、美しいと言えるものではなかった。あちこちに無理に林を横切ろうとする道があったり、湾岸には、海を濁して伸びる灰色の陸があった。四国にある地方の町だったが、

最近、急に都市化が進んでいたのだ。
『自然を破壊してまで、道路建設や湾岸の埋め立てをする必要はない』
一部の住人は声高らかに叫んでいたが、始められたものは止められないと、その声は無視同然に聞き流されていた。
「まるでセーターの虫食いだ。自分の服だと思ったら、絶対、許さないだろうに」
「けど、こういうことって、世界の至る所で起こってるのよね。人間は自分勝手に世界の秩序を壊しているんだわ」
綾乃が顔をしかめ、胸をおさえた。

「村井さん。あれ、おかしいよ」
視線を近くにずらした真一が、山裾を指さした。
中学から歩いて五分ほどの神社に、数十人もの人だかりができていた。少し離れた神社にも、たくさん集まっている。

・・！　・・！　・・！

目を凝らした二人に、重いものを打ちつける音が聞こえてきた。
「建物の前で、何か壊しはじめている」
「狛犬だわ」
綾乃の言うとおりだった。人々は、大きなハンマーやらつるはしを神社の狛犬に打ちつけていたのだ。
「狛犬って、悪い霊から神様を守るために置いてあるのよね。ということは、」
「町の人たちは、邪神を迎える準備をしているんだ」
真一は、震えそうになる唇に手を当てて言った。
「見て」
綾乃は、学校の校庭に目を向けていた。
「あれは博物館の車」

校庭の中ほどに、昨夜、玄関先で見かけたワゴン車が停まっていた。すぐにもドアが開き、大切そうに何かを抱えた一人が出てきた。その人は、先日掘ったままだった穴に入り、抱えていたものを置いた。
「隕石を元の穴に戻しているんだ」
やがて、掘り出した時と同じように、ショベルカーが動きだし、穴を埋めはじめた。

陽が強く照り始めた頃には、校庭は平らになっていた。
ショベルカーは校門まで下がり、五、六人の人が、竹ぼうきで丁寧に校庭を掃きだした。すっかりきれいになってから暫くして、白茶けていた土が濃い茶色に変わっていった。そして中心あたりがごっぽりと凹み、中から黒いものが出てきた。
「あれは・・」
それはまるで虫のようだった。鋏のようなものが見えたかと思うと、ショベルカーを凌ぐ大きさの体が這い出してきた。
「アリジゴクだ！」
真一の横で、綾乃が口を押さえた。
アリジゴクの怪物は、巨大な体を揺すらせて、校庭をぐるぐると回りはじめた。バネ仕掛けのような黒い後ろ脚からは、弾かれた土の塊が、びゅんと音がするように校庭の端に飛んでいっている。

「あれが邪神・・そう言えば田中君たち、校庭にアリジゴクを埋めたって・・」
「そうだ。それに邪神が取り憑いたんだ。そして今、作っているのは巣。邪神は人間を引きずり込んで食べるための　巣を作ってるんだ。ああっ」
唸るようにいった真一が、急に首筋に手を当てた。
ライオンに噛まれた傷跡が、我慢できないほどに痛みはじめたのだ。息もろくにできず、悶えながら地面に倒れた。綾乃はどうしようもなく、苦しむ真一を見つめるばかりだったが、

「首に！」
突然、目を見張って叫んだ。
激しい痛みのなかで、真一は首をまさぐった。何かの形のように凸凹としている。
「首の傷が、ライオンの形になってるわ」

11、二頭の獅子

「とうとう、邪神が姿を現しましたな」
どこからか低い声が聞こえた。同時に、首の痛みは嘘のように消えていった。
ゴ　ゴ　ゴゴ・・・
石臼をひくような音に目を向ければ、社の前に並んだ右の狛犬の像が揺れていた。こちらの足下は揺れてはいない。地震が起こったわけではない。
狛犬はやがて、ギリギリと音を立てながら動き始めた。ぎくしゃくと後ろ足を立てている。徐々にその動きは滑らかになり、大きく伸びをはじめた。表面についていた土垢がばらばらと落ちていく。威厳をもったその動きは以前にも見たことがあった。

「君は、守護獅子なのか」
立ち上がりながら真一は、おそるおそる聞いた。
「もちろんですとも。我が魂は、この地に残ると言ったではありませぬか。愚かなる邪神よ。我が力を体現するための獅子の像は、未だに残っておるのに。焦るところをみると、よほど腹を空かせているのか」
耳元まで切れ込んだ動く石像の口の奥から、流暢な言葉が流れ出た。心に語りかけるものではないが、その語り口調もまた、以前と同じだった。

思いもよらぬところでのライオンとの再会だった。すぐに駆け寄ろうとした二人だったが、その足は動かなかった。
左側で口を閉じていた狛犬までが、ぎしぎしと動き始めていたのだ。捜し物でもしているかのように、ゆっくりと首を回している。

「剣獅子。お主の乗り手、巫女殿はそこに」
「剣獅子？」
真一の疑問に、右に位置する守護獅子が応えた。
「剣獅子は、ワタシがこの石像に宿った時に復活し、行動を共にするもの。また剣獅子は、巫女を乗せて走り、そして剣士の手に仕えるもの。
遥か古代、我らは生ける獅子の体に宿り、この地上に現れておりました。奢れる人間たちの住まう地域、邪神の現れる地域は限られていて、それでよかったのです。
ですが、文明の広がりとともに、事足らなくなることを危惧したあなた、剣士殿の魂が、人々を導き、ワタシたちの宿り先を、世界のあらゆる場所に作ったのです。神をまつる建物の前にある対になった獅子の像は、まさにそれです。
さあ、お乗り下さい、剣士殿はワタシの背に、巫女殿は剣獅子の背に」

「このまま、ここで高みの見物をしているわけにはいかない。行こう、村井さん！」
口を閉じたままの狛犬に睨まれ、硬くなってしまった綾乃の手を引き、真一は力強く言った。
「うん」
綾乃は震えながらも頷いた。
二人が各々の狛犬の背に跨った時、二頭の躯はたちまちしなやかになり、あのライオンのように、一回りも大きくなった。
「お二人様、それでは参ります」
守護獅子が吠えるように言った。

二頭のライオン、いや、守護獅子と剣獅子は、石の台座を蹴り立て、一気に荒れ山を下っていった。駆けるというより、飛ぶと言ったほうが近い。時々、地面を爪でかき、方向を変えている。回転こそは

しないが、遊園地のアトラクションなど比べものにならないほどの迫力である。二人は太い首にしがみついているだけで精一杯だった。

山を下った二頭は、中学校を過ぎ、大通りに向かった。

「どこに行くんだい。邪神の所では」

やっと顔を上げられるようになった真一が聞いた。

「まずは奴の呼び声が、人々の心に届かないようにしなければなりません。

呼び声に従っている人々は、我らの行く手を阻もうとします。そのような状態では、思うように戦えません。これより向かうは、ワタシの友人である、自然の申し子たちのところ」

守護獅子が低く答えた。

二頭は、しなやかに体を弾ませ、風のように走っていった。つい先ほどまで石の像であったなど、誰が想像できるだろう。

途中の道々には、車は一台も走っておらず、代わりに、幾つもの人だかりと擦れ違った。

二頭の獅子に気づいた人は、拳やら、棒切れを振り上げて追いかけてきた。普通なら、悲鳴をあげて逃げだしたはずである。神社の狛犬を破壊するのと同様、人々は邪神の呼び声に従っていた。

綾乃はまだ、剣獅子の首に顔をうずめしがみついていた。前を見る真一の目に、象の絵の描かれた看板が映った。

「君が向かっているのは動物園？」

「その通りでございます」

守護獅子が答え、蒸気のように熱い息が頬をかすめた。

二頭は大通りからはずれ、動物園のある山に向かって一直線に走った。前を塞ぐ家々の屋根を蹴り立て、十メートル以上もある川を飛び越えて進んだのだ。

12、自然の申し子

ザザッ　ザザッ・・
今や、真一たちは、木々の生い茂る薄暗い山中を突っ切って登っていた。
「平田君」
明るい呼びかけに、隣に目をやった真一は驚いた。だいぶ慣れたのか、綾乃は片腕を剣獅子の首に回し、こちらを向いて手を振っていのだ。
「くっ、やるなあ」
自分もと手を振った途端、小枝が激しく頬を叩いた。
「いてて」
「油断めされるな、剣士殿、さあ、しっかりおつかまりを！」
目前に緑色の高いフェンスが見え、真一は慌てて、逞しい首にしがみついた。
「うわおー」
木々の梢を越えるほどに高くジャンプした二頭は、動物園の裏口に降り立った。

開園を迎える時間が迫っているはずだが、園内は静まり返っていた。飼育員も動物たちの姿も見えない。視線を回せば、鳥類だけは檻籠の中にいるらしく、高い枝にとまったコンドルが、じっとこちらを見ていた。
二頭の獅子は先に進んだ。気配を感じたのか、園内のあちらこちらから、低い呻き声のような動物の鳴き声が聞こえた。と、向こうにちらりと人影が・・・。二頭はそちらに駆けだした。
目の前には、重そうなバケツを抱えた園長が、忙しそうに歩いていた。

「園長さん」
後ろから真一が声をかけた。園長は振り返りながら、目を大きく見開き、バケツを落とした。リンゴやら人参のかけらがゴロゴロとこぼれ出た。
「あわわわ」
園長は池の鯉のように口をぱくつかせている。その人間くさい反応からは、まだあの隕石を見ていなかった様子である。博物館の車も、こんな山中までは回ってこなかったのだ。
「大丈夫、私たちよ」
綾乃が優しく声をかけた。
焦点の定まらない目付きをしていた園長は、ようやく二人に気がついた。
「き、君たち、一体全体、これはどうしたことか。それに、真一君の跨っているのは、あの白いライオンではないか。やや！綾乃ちゃんもあのライオンに。わしは夢でも見ているのか」
園長は頬をつねった。
「あいたー」
強くつねりすぎたのか、太った頬には血の滲みができていた。
「こりゃ現実だ。真一君、どうなっている」
二頭の獅子を見つめる園長の高ぶった声に、真一の胸の奥がじんわりと温かくなった。
「普通に気持ちを分かちあえる人がいる。それだけなのに、なんて素敵なんだ」
しみじみとした呟きに、口を結んだ綾乃が頷いた。
二人は獅子から降り、これまでのことを短く説明した。
園長からの話では、飼育員たちは、昨日から動物園に来なくなってしまい、連絡も取れなくなってしまったとのこと。そのせいで開園するわけにもいかず、一人で管理舎にいる動物たちの世話をしていたのだ。

話し終えた後で、園長は守護獅子に近づき、その柔らかいたてがみに頬ずりした。
「おまえさんが、そんなごたいそうなライオンだったとはなあ」
「園長よ、時間がない。力を貸してほしい」
守護獅子が口を開いた。
「こいつはたまげた、おまえさん、わしにも口がきけるのか。おうおう、なんでも言ってみい。他でもない守護獅子の申し出だ」
真一と綾乃は顔を見合わせた。一体、守護獅子は何をしようというのだろう。

「ここにいる動物たちを、外に解放してくれ」
園長は、再び頬をつねった。
「動物たちを解放する？まさか園の外にかい？」
「人間を、邪神の呼び声に従わせなくするために必要なのだ」
話を聞いた二人も驚いた。サファリパークでもあるまいし、動物たちが町中を歩き回るなど、邪神以上に大きな問題になるのでは・・・。
さらに驚いたのは、目に涙を浮かべた園長の返事だった。
「素敵なことだ。動物たちが、人間を救ってくれるなんて。ようし、その申し出、了解した」
「感謝する」
守護獅子が首を大きく揺らした。そして鋭い牙を剥き出し、雷の轟きのような吠え声をたてた。それに応えるように、園内の管理舎に入っている動物たちの鳴き声が、がやがやと響いた。
「自然の申し子たちも協力してくれるといっている。さあ、園長よ」

「おお、わかった」
園長は、ジャラジャラと腰にぶら下げていた鍵の束を、真一と綾乃に分けた。
「君たちも手伝ってくれ、鍵に書かれている数字は、管理舎にぶら

下がっているプレートナンバーと同じだ」

ずしりと重い鍵の束を握りしめ、三人は動物園を駆け回った。
真一の鍵には、白熊の管理舎のものが混じっていたが、見上げるような白熊は、太い腕を振り上げることもなく、おとなしく首を振って出てきた。
園の中央の芝生広場には、何百匹もの動物が勢揃いした。皆、鳴き声をたてることなく、前に立つ真一たちに頭を下げている。
「剣士殿、お声かけを」
守護獅子がたてがみを真一の胸に撫でつけた。強く握った拳が、空に向かって突き出された。
「我が兄弟たちよ、内に秘めたる野生の息吹、放ちたまえ！」
高らかに言い放った後で真一は驚いた。まさか自分が、そんなことをするなど思ってもいなかったのだ。
「さすが剣士殿。皆々の眠っていた命が目覚めましたぞ」
そよ風に揺れていた動物たちの毛並みが引き締まっていた。
先ほどまで感じなかった息遣いが、熱いほどに伝わってくる。首を低く伸ばし、今にも走りだしそうに身構えている。

「お二人様、参りましょう！」
真一と綾乃が跨った途端、ふたたび獅子たちは走りはじめた。
動物たちは後を追ってきている。翼のあるものは空に舞い上がった。
隣に、カモシカが蹄を蹴り立てて走り込んできた。横目に見つめる瞳には、赤い炎が燃え盛っているようだ。ずっと後ろでは、ペンギンたちが懸命に歩いている。空には、色とりどりの翼が広がっている。風切り羽根を切られ、飛べないはずのフラミンゴまでが、精一杯、翼を伸ばして羽ばたいている。
「なんて雄壮で、鮮やかなんだ」
「忘れていた本当の命を取り戻したみたい」
二人は、窮屈な家から放たれた動物たちの群れに心を奪われながら

も、また緑のフェンスが目の前にあることに気づき、慌てて太い首に腕を回した。

ドシャーン！

爆音のような響きに振り返れば、今飛び越えたばかりのフェンスが、前に押し倒され、象とサイが土煙をあげて、突進してくるところだった。

それになんと、象の背には飾り用の首輪にしがみついた園長が跨っているではないか。

「ひゃっほー、わしゃ、子供の頃からこれをやりたかったんだ！」

「いいぞ、園長さん」

真一は、エールを送るように片手を振り上げた。胸の奥に熱い力が沸いてくるようだった。隣を走る綾乃は目を輝かせ、紅潮した頬に微笑みを浮かべていた。

１３、邪神との戦い１

動物たちは雪崩のように山を下り、町に飛び込んだ。
さすがに翼を持たない動物たちは、二頭の獅子のように高く跳ぶことはできず、道々を走っていたのだが、大地を蹴り立てる地響きは、命そのものの重さを表すように凄まじかった。通りにある家々の窓ガラスが、次々と割れていった。
「これは・・」
後ろを見た真一は目を見張った。
いつの間にか、動物たちの数が異常に増えていたのだ。町に住まう動物たちが、すべて群れに加わったと言ってもよいだろう。首輪や鎖まで付けた犬や猫、鼠の大群・・空には黒雲のように無数の鳥たちが羽ばたいていた
町の中心にある警察署の前まで来た時、守護獅子は、急に止まって振り返った。

ウーォーーーンー
低く長い吠え声が、鋭い牙の間から絞り出された。
動物たちも、それに応えるように吠えはじめた。空を舞う鳥たちも、高らかに鳴き声をあげた。それぞれ町の中心から外れて、どこかに散っていく。
「動物たちが離れていく。いいのかい」
真一は聞いた。
「ただに離れていくのではありませぬ。邪神の呼び声に満たされたこの町を包囲しにいったのです」
それで？と聞く前に、周囲の音が変わったことに気がついた。
遠く離れていく無数のけたたましい鳴き声が、一つの音楽のようにハーモニーを奏ではじめていた。

「彼らの歌声・・迸り出た自然の息吹は、それに反する邪神の声に干渉し、人の耳に届かないようにしてくれるのです」
そう話した守護獅子は再び走りはじめた。

今、町は、巨大な二つの力がぶつかり合っていた。雲一つない青空には、心なしか、薄い火花が飛び交っているように見えた。
途中、幾つかの人だかりがあったが、人々は何をすることもなく、ただ止まっていた。さらに先に行くと、一列に並んだ人々が見えた。歩くこともなく、その場で固まっている。顔は前を向いたままだ。
「剣士殿、既に死の行進がはじまっています。ここにいる人々は助かるが、さて、先に行った人はどうなったか」
「この列の先に、邪神がいるのかい」
「おっしゃる通り。列の先頭には、人々を喰らう邪神の口があるのです」
真一の問いに守護獅子が唸った。

町中に響く美しいハーモニーを浴びながら、二頭の獅子は先を急いだ。
中学の正門を過ぎた所に、真一の家族が止まっていた。その少し先には、綾乃の両親の姿が見える。
「よかったね、村井さん」
二人の目から涙が溢れ、後ろに流れていった。
疾風のように校舎を横切った二頭は、校庭の前に出た。
広いグラウンドには、巨大なすり鉢ができあがっていた。それは、アリジゴクとして姿を現した邪神の巣だった。
人々の列は、縁から十メートルほどの所で隙間を開けている。そしてその先頭には、ああ、健太と正が並んでいる。

「間に合ったようです。まだ、誰も巣には落ち込んではいませぬ」
首をまわした守護獅子は、もう一頭とともに、息が止まるかと思う

ほどに高く跳び上がり、三階建ての校舎の屋上に降り立った。
アリジゴクの巣がすぐ下に見える。その中心には、巨大な黒い塊がうごめいていた。それはぐるりと回転し、茶色の目をもった醜い顔を屋上に向けた。
『来たな』
真一の耳の奥に、耳障りな甲高い声が響いた。黒板を掻く音に似ている。隣の綾乃も顔をしかめている。
『微かに刻まれた記憶の欠片が、貴様たちのことを教えてくれた。聖なる二頭の獅子、それに剣士と巫女。喧しい動物たちの声が聞こえ、人間たちの歩みが止まったと思ったら、お主らがやってくるとは。ほう、剣士と巫女とは、それほどに若かっただろうか」
話し終えるかその前に、黒い口がカパッと開き、赤黒い液体が、屋上めがけて吐き出された。
真一と綾乃は、反射的にたてがみに身を伏せたが、顔を上げた時には、隣接する体育館の屋根に飛び移っていた。先ほどいた屋上は、白い煙をあげて溶けだしている。
「僕は、どうしたらいい」
太い首にしがみつきながら真一は聞いた。
唐突といえば、唐突だった。邪神に立ち向かうという心構えはあったが、戦うための準備などしていない。それに剣士たる者がもつ剣は何処にあるというのか。
「以前に同じ、輝く剣を、あなたの心の導く先に突き立てるのです」
「しかし、剣といっても」
「それは流れに乗りて、あなたの手の中に」
そう言った守護獅子は、隣の獅子の首元に前脚を伸ばした。すると、剣獅子が首を斜めに回し、これまで閉じたままだった口を薄く開けた。中から短い筒のようなものが飛び出している。剣ではない。
「巫女殿、それを」
「これは横笛」
筒を手に取った綾乃が小さく叫んだ。

『お若い剣士どの、戦い方をお忘れかい？ようく考えなされ』
笑い声が頭に響いた。
『どれ、まずは、わしの躯を選んでくれた子供たちからいただこう。せっかくだ、こちらから参ろう』
ぐるりと回転した邪神は、人々の列の先頭に顔を向けた。
「健太、正。逃げるんだ！」
真一は大声で叫んだ。しかし、二人は微動だにしない。

「戦いの時！剣士殿。巫女殿は調べを」
守護獅子が巣の上に高く跳び、剣獅子がさらに高く跳んだ。宿した巫女の魂によるものだろう、綾乃は全く不安定な姿勢ながら、横笛に口をつけた。古代人の舞いの調べのような音階を奏ではじめている。
剣獅子はいつの間にか、空中にかき消え、真一の前に綾乃が跨るように落ちてきた。続いて右手に、ずしりと重みが加わった。
それは銀色の剣だった。綾乃の吹く笛の音色とともに、剣獅子は一振りの剣となったのだ。一頭となった獅子は邪神めがけて落ちていった。
「巫女殿、剣士殿の剣に光を！」
守護獅子が吠えた。
綾乃は笛を奏でながら剣を見つめた。
細かい振動が剣にまとわりつき、刃の周辺が金色に光りはじめた。
真一は獅子の背を蹴った。

１４、邪神との戦い２

足元は、アリジゴクの黒い背だった。
剣山のような短い剛毛が、薄い上靴の底に突き刺さっている。隣に降りた守護獅子は、綾乃を乗せたまま校庭の端に飛び移った。
「剣士殿、剣の輝きの長さには限りがあります。お急ぎを！」
『けど、心の導く先なんて』
剣を高く構えたまま、真一は動けなかった。
『剣士や。背中か。ちとかゆい』
細かく震えた黒い背が斜めにかしぎ、思わず片手をついた。皮ふを突き破った鋭い毛から、電流のようなものがビリビリと伝わった。

ドッ　ドッ　ドッ
真一の胸の鼓動と同調するように、大きく脈打つような音が響いた。
彼の背よりも大きな鋏のついた頭の真下から聞こえてくる。
「そこだ」
剣を持ち替えた真一は、切っ先を下に構えた。
「待って、平田君！」
笛の調べが止まり、綾乃の声が響いた。
「何を」
顔を上げた真一の目に信じられないことが映っていた。巣の端から、綾乃が滑り降りてきたのだ。
『ほう、これは。巫女が自らやってくるとは』
邪神は、綾乃がやってくる方に体を向け、巨大な鋏を打ち鳴らした。
「危ない！」
真一は邪神の口の前に飛び降り、剣を薙ぎ払った。輝きを鈍らせながらも、剣は巨大な鋏を根元から切り落とした。
『グゥ、体に傷を。許せぬ！』

真一を噛み砕こうと、ギラギラ光る牙が剥き出された。

「平田君、口の上のあの赤い玉を切って！」

間近に迫る邪神の口の上に、ゴルフボールほどの玉があった。再び、流れ始めた調べを背後に、真一は土に滑る足を強く蹴り込んで切りかかった。

ガシャ！

輝く剣の切っ先を受けた赤い玉が、ガラス玉のような音をたてて割れた。

『未熟者、それでわしを退治したつもりか』

赤い玉を切った反動で、すり鉢の傾斜を転がり落ちた真一は、土に剣を突き立て、邪神の腹の下に滑り込むのをおさえた。そして隣によろめく綾乃の体をしっかりと抱きしめた。

グシャッククク　グシャッククク・・

目前で、邪神の牙が火花を散らして鳴っている。ついで、洞穴のような口がかっぽりと開いた。

間一髪・・

白い輝きが横切った。

真一と綾乃は、守護獅子の口にくわえられ、巣の端にいた。

二人を地面に降ろした守護獅子は、再び跳び上がり、斜面を駆け登ってこようとする邪神の頭を強く蹴り、元の位置に戻った。黒い巨体は反転しながら、穴の底に滑り落ちていった。

「どうして、あんな無茶を」

真一は綾乃に振り返った。

「私、聞こえたの。笛の調べの中に、【怖い。殺さないで、ここから出して】って声が混じってきたの」

「お二人様、ご覧下さい」

守護獅子の声に、二人は巣の下に目を向けた。

裏返った体を元に戻そうともがく邪神の口の上から、赤い煙が流れ

出ていた。黒い巨体をなめるように覆っていく。
『クワッー、剣士め、何をしたぁー』
鼓膜が裂けるような高い声とともに、邪神の体が変形しはじめた。アリジゴクは恐ろしい鷲の形となり、やがて巨大な蜘蛛となり、大ナメクジ、竜となり・・変形するたびに輪郭がぼやけていった。
「剣士殿、あれらは、これまで我らが戦ってきた邪神の姿。あなたは、奴の姿を形作った人々の怖れを解き放ったのです」
「怖れが邪神の姿を形作った？それがアリジコク？正たちが校庭に置いたアリジゴクに宿ったのでは」
「確かに。今回、邪神があれほどに明確な形を成していたのは、まさにその虫の性質が、人々の怖れと合致したからに違いありません。人々の怖れ・・それは、何かに足を掬われ、破滅に向かって堕ちていく・・そういったものだったのでしょう。その怖れ故に、視野が狭まった人々は、自然界の大いなる秩序と共にあることを忘れてしまったのです」
「それで不必要な工事をしたり、環境を壊したりしてしまったのね」
「そして巫女殿は、人の怖れの叫びを聞かれたのです。これまでの戦いでは、邪神とともに葬っていました」
守護獅子の説明に、二人は頷いた。

巣の下の邪神は薄くぼやけ、やがて姿を消した。後には、赤い光が静かに漂っているだけだ。
間近に寄り添う守護獅子の毛並みがごわついていた。真一の手に握られていた剣は、にわかに重みを増し、地面に落ちた。
「お二人様、このようなことは初めてです」
守護獅子が話した。声には、岩を擦り合わせるような、ギリギリという音が混じっている。
「これまでは、いずこかに去っていたワタシの魂が、この世界にほのかに広がっていきそうです。剣士殿、巫女殿、いつもならお別れ

の挨拶を述べるのですが・・・」
守護獅子の口が止まり、内部から青い光がこぼれ出た。それは、邪神の巣の坂を流れ下り、底にあった赤い光と混ざり合った。
次の瞬間、目が眩むほどの激しい光の渦が生まれ、突風を巻き起こしながら空に登っていった。
やがて、辺りに雪のように白いものが降り始めた。
それは見た目は大粒の雪のようだが、肌に触れる感触はさらさらと軽く、ほんのりと温かいものだった。
「あれ？」
耳を澄ました真一の耳に、もはや、動物たちの歌声は聞こえてこなかった。

守護獅子は、石の狛犬に戻っていた。
地面に落ちた剣も、口を開けたままのおかしな狛犬の姿に戻っている。綾乃がそっと横笛を置くと、元の通り、口を閉ざした厳めしい顔になった。
「青い光と赤い光は、互いに求め合っているように見えたわ」
冷たい石の像を撫でながら、綾乃が言った。
「うん、僕にもそう見えた。今、降っているこの雪みたいなものは、守護獅子と邪神が混じり合ったものなんだと思う」
「地上が生み出した正の力と、宇宙が生み出した負の力が一つになったのね。
　見て！」
綾乃が嬉しそうに叫んだ。
校庭の周囲に積み重なっていた土が、じりじりと移動し、穴に落ちていっている。校舎を見れば、邪神の毒液で溶けていた部分が元に戻りつつある。
凍りついたように立っていた人々が動き始めた。土の流れにすくわれまいと、足踏みをしながら、何が起こったのかと、あたりを見回している。

「おーい」
校庭の端から、園長が腰をさすりながら駆けてきた。
「ふー、二人とも大丈夫か。妙な雪が降り始めたと思ったら、象の太郎がわしをおっぽりだしてな。そして皆、動物園の方に帰っていってしまったんだ。それで邪神は？あのライオンたちは？」
二人は、降り注ぐ結晶に手を伸ばし、にこりと頷いた。
「なんとまあ、これになってしまったということか。それにしても、これは何なんだ。白鳥の羽根の先のような・・・でも、柔らかくはなくて、それによい香りがするような」
ゼイゼイと息を切らしていた園長の顔がほころんでいった。地面に落ちた時に打った腰の痛みは消えてしまったようだ。
「何だかわからんが、素敵なものじゃ」
「あら！」
綾乃が驚いたような声を出した。真一の首を見つめている。
真一が手をやると、これまであったライオンの形をした凹凸が消えていた。瘡蓋になっていた傷跡もきれいになくなっている。
「守護獅子とも、お別れなのかしら」
少し寂しそうな顔をした綾乃の手を、真一はしっかりと握った。
「僕たちが、大切なものを忘れない限り、彼はずっと一緒にいる」
あたりを白くおおった結晶は、やがて跡形もなく消えていった。

「よぉ、真一」
陽気な声が聞こえた。健太と正がこっそり後ろにきていた。肩をぶつけ合いながらニヤついている。
「俺たち、今、まずいもの見ちゃった気がするんだけど。お二人さんが、手を繋ぎながら見つめ合ってたっていうかさ」
「まずかったのは、おまえたちだろう！」
真一が怒鳴った。
「ひえー、何かわからんけど、真一が怒った。逃げろ！」

駆けだした二人を真一は追いかけた。
微笑みながら見守る綾乃の後ろで、園長が太い体を揺らしながら駆けていく。おそらく、動物園に帰っていくのだろう。はたして動物たちがすんなり檻に入ってくれるかは、予想もできないことであるが・・・。

終章

町を襲った事件については、真一と綾乃、動物園の園長の他は、誰も覚えていなかった。皆、あの白いライオンが来てからの記憶をなくしていたのだ。
不思議なことに、新聞や週刊誌の記事からも、ライオンに関することは消えていた。
ぽっかりと隙間を開けた記事、空のビデオテープ、それに加えて、世界各地で観測された謎の白い結晶・・
そういったことが山ほどに報告され、日本を中心に、地球的規模で起こった怪事件として巷を騒がせた。

【それは、自然界の秩序の乱れと、均衡を戻そうとする力によって起こったこと。人智を超えた力が、何らかの作用を及ぼしたのです。我ら人間は、自然界の秩序を構成する歯車の一つであることを自覚しなければなりません。さもなくば、取り返しのつかない災いを招くことになるでしょう】

遥か西方の彼方、チベットの山奥で修行する一人の若い僧侶が、わざわざ日本のテレビ局を訪れ、カメラに向かって話していた。
だが、あまりにも漠然とした内容に、気づきを得る人はほとんどいなかった。
一方、町の人はというと呑気なもので、神社の狛犬が壊れ、たくさんの窓ガラスが割れていることに驚いたが、
「どこの罰当たりの連中だ。警察に、もっと厳しい目を光らせてもらわんと困る」等
自分たちが関与していたとは考えもせず、架空の悪者を想像して納得していた。

動物園の園長は、邪神の呼び声から人々を救った動物たちを自慢したくて、多くの人に事件の真相を話した。もちろん、誰も信じてはくれなかったが、それでも、面白い話をしてくれる園長がいるということで、入園者は増えていった。

真一と綾乃は、誰にも話さなかった。きっと信じてもらえないだろうし、取りあえずは、その必要もなくなったように思えたからだ。はっきりと、何かが変わったわけではないのだが、町の人の顔には、ゆったりとした笑顔が増えていた。形のないものに追われているような、切迫した感じが消えていたのだ。
身近な所では、日曜日ともなると、誰が言うというのでなく、壊れた狛犬を直したり、河原に落ちている塵などを拾ったりした。
町内やその周辺で行われていた様々な開発工事については、本当に必要なのか、再度、検討しようという意見が強まっていった。
ＴＶニュースでは、自然との共存を訴える団体が世界各国で生まれ、支援者が増加していると報道されていた。果たして、今後どのように展開していくのかは予想だにできないが・・・

真一の竹刀を振る形は、以前のように軽やかさが戻っていた。体育館の片隅で、綾乃が歌を口ずさみながら見つめても、何も起こらなかったた。
ただ、その一振り一振りに、以前に増して勢いが加わり、相手に立った者は、竹刀の先に、火花のような輝きを見たような気がした。

さて、校庭に残された狛犬の像はどうなったことだろう。

「ふう、やたらに重い。俺らで引き上げるなんて。真一、なんでそんなん生徒会に提案したんだよ！」
太いロープを引きながら、力自慢の健太が唸っている。

「命を助けてくれたんだ。当然だろう」
真一は、斜めに体をよじりながら笑った。
「ちいっ、わけがわからん」
「もうちょっとだよ、健太君。頂上に着いたら、冷たいジュースが待ってるってさ」
正が苦しそうにあえいだ。手を伸ばしているだけでも辛そうである。

今、津田川中学校の生徒たちは、力を合わせてロープを引いているところだった。厚板に乗せられた二頭の狛犬が、じりじりと荒れ山の坂を登っていく。
列の後方から真一を見上げる綾乃が、顔をひきつらせながらも微笑んだ。
『見て、狛犬の顔、笑っているみたい』
そう声に聞こえるようだ。
真一は頷いた。
『うん。嬉しくてたまらないみたいだ。
待ってろ、守護獅子と剣獅子。今度、その体に宿った時にびっくりするように、ぴかぴかに磨いてやるから』

八月の終わりの太陽が、さやさやと揺れる木の葉の間でまぶしく煌めいていた。

了

終章（後書き）

☆これは、ポプラ社さんがネット小説賞を開催していたときに、児童文学賞を頂いた思い出深い作品です（内容・主人公年齢等改訂）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5903h/

白い結晶の降った日〜ボクらは剣士と巫女になった

2011年1月16日14時52分発行